

2019 年春 超短期派遣プログラム報告書

派遣先: オーストラリア・メルボルン 派遣期間: 2019年3月7日~3月17日



目次

1. 海外派遣プログラムの目的	5
2. 参加学生の紹介と派遣日程	6
2-1.参加学生・引率教職員および受け入れ先関係者の)紹介6
2-2. 派遣プログラムの日程	7
3. オーストラリア全体の概要	8
3-1. オーストラリアの概要	8
(1)正式名称と国旗	8
(2)州と都市	8
(3)人口と面積	9
(4)環境と生態系	9
(5)言語と民族・宗教	10
(6)通貨と経済	10
(7)教育体制	11
(8)観光	11
3-2. オーストラリアの歴史	12
(1)中世以前のオーストラリア(~15 世紀)	12
(2)近世のオーストラリア(16 世紀~19 世紀初頭	(i)12
(3)近代のオーストラリア(19 世紀初頭〜20 世紀	E)13
(4)現代のオーストラリア(20 世紀~)	13
3-3. オーストラリアの人物	15
(1) Banjo (Andrew Barton Paterson) (1864-194	1)15
(2) Max Dupain (1911~1992)	15
(3) Howard Walter Florey (1898∼1968)	16
4. メルボルンの概要	17
4-1.メルボルンの基礎データ	17
(1)地理・人口	17
(2)政治体制	17
(3)経済、産業	17
(4)文化	18
4-2. メルボルンの歴史	
(1)メルボルンの成り立ち	18
(2)メルボルンの歴史的な建造物	18
4-3. メルボルンの人物	20
(1) Cate Blanchett (1969-)	20

(2) Kylie Ann Minogue (1968-)	20
(3) Peter Singer (1946-)	20
5. メルボルンでの体験	21
5-1. メルボルン大学 Parkville Campusの概要の概要	21
5-2. 講義概要	23
(1) Biomedical, Chemical & Biomolecular Materials Engineering	<mark>1ース</mark> 23
(2) <mark>Mechanical コース</mark>	24
(3) <mark>両コース共通の講義</mark>	27
(4) <mark>その他の講義</mark>	28
5-3. 研究室・大学施設見学	33
(1) Student Accommodation Tour (Student Village)	33
(2) Thermodynamics Lab Tour	33
(3) Hydraulics Lab Tour	34
(4) Nanostructured Interfaces and Materials Science Lab Tour	34
(5) Teaching Lab Tour	35
5-4. Japanese Club Conversation Classについて	35
(1)参加概要	35
(2)Class 参加の感想	36
5-5. Come and try Netball	41
5-6. Tokyo Tech Presentationについて	42
(1)日本について	42
(2) 東工大について	43
(3)その他	44
5-7. 学生交流 Student Exchange	44
6. その他	46
6-1. メルボルンでの食事	
6-2. メルボルン:街の様子	
6-3. 休日の過ごし方(観光紹介)	
(1)ペンギンツアー	
(2)ワイナリーツアー	
(3)ロッドレーバーアリーナ	
(4)メルボルンの王立植物園	
(5)グレートオーシャンロード	
(6)セント・キルダ・ビーチ	
(7) ブライトン・ビーチ	70
(8) カフェ	71

(9)セント・パトリック大聖堂	72
(10) ルナパーク	73
(11)F 1 オーストラリアン・グランプリ	
(12) アーケード	74
(13) スーパー	74
(14) カジノ	75
7. 所感	76
8. 参考文献	85
9. 付録	90
9-1. 収録内容について	90
9-2. 食事処&観光地マップ	91

1. 海外派遣プログラムの目的

本プログラムは、グローバル理工人育成コースの下記4つのプログラムのうち、4)実践型海外派遣プログラムの一環として実施される。

なお、本学における「グローバル理工人」とは、「世界の企業、大学、研究所、国際機関など、様々な分野で活躍できる科学者・エンジニア・技術者」のことを指す。

- 1) 国際意識醸成プログラム
 - : 国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな活躍への意欲を養う
- 2) 英語力・コミュニケーション力強化プログラム
 - : 海外の大学などで勉学するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う
- 3) 科学技術を用いた国際協力実践プログラム
 - :国や文化の違いを越えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつ つ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う
- 4) 実践型海外派遣プログラム
 - :自らの専門性を基礎として、海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う

グローバル理工人育成コースにおける4)の実践型海外派遣プログラムのねらいは、学生 を海外に派遣し、現在まで育成された能力を活用し、自身の今後の研究やキャリア形成の参 考となるような経験を積むことである。

<参考>実践型海外派遣プログラムは、以下の5能力の育成を目指すものである。

- 1) 自らの専門性を基礎として、異なる環境において生活し、業務を遂行する能力
- 2) 窮地を乗り切るための判断力・危機管理能力など、自らの意思による行動に必要な能力
- 3) 異文化理解を進め、相手の考えを理解して自分の考えを説明するためのコミュニケーション能力・語学力・表現力
- 4)海外の様々な場において、実践的技量と科学技術者としての倫理を身につけ、チームワークと協調性を発揮し、課題発見・問題解決を行うための能力
- 5) 新興国における科学技術分野で活躍するための基礎的な能力

2. 参加学生の紹介と派遣日程

2-1. 参加学生・引率教職員および受け入れ先関係者の紹介



図 1 Welcome and Campus Tour にて

前列左から

4番目 (Ms. Beth Hunter :メルボルン大学工学部 学生交流担当)

後列左から

3 番目

(Prof. George Franks:メルボルン大学 工学部 化学工学科所属・受け入れ担当教授)

7番目 吉川史郎先生:物質理工学院 応用化学系 准教授

8番目 鎺広顕先生 :環境・社会理工学院 融合理工学系 助教

(上記所属は2019年3月1日現在のもの)

2-2. 派遣プログラムの日程(担当:加藤)

日付	時間	内容	備考
0./7	10:40 頃	成田国際空港発	JL773 便・直行
3/7	23:00 頃	メルボルン国際空港着	以降、現地時間
(木)	~00:30	Mercure Welcome Hotel Melbourne 着	タクシー移動
3/8	11:30~	メルボルン市内見学	両替所・Woolworth
(金)	14:00~	各自、自由行動	・州立図書館など
2 /0		各自、自由行動	
3/9	13:30~22:40	希望者のみ:ペンギンツアー	参加費
(土)		ペンギンツアー組、ホテル着	12330 円/人
3/10		Market や博物館などを見学	Moomba Festival
(日)		希望者のみ:ワイナリーツアー	約 12000 円/人
3/11	10:00~11:30	Welcome and Campus Tour	
(月)	午後	各自、講義受講	
	午前	各自、講義受講	
3/12	10:00~11:00	Student Accommodation Tour	Student Village
(火)	12:00~14:00	Japanese Club Conversation Class	現地学生との交流
	15:30~16:30	Thermodynamics Lab Tour	ラボツアー
	午後	各自、講義受講 or 観光	
	午前	各自、講義受講	
3/13	10:00~11:00	Hydraulics Lab Tour	ラボツアー
(水)	午後	各自、講義受講	
	15:30~16:30	NIMS Lab Tour	ラボツアー
3/14	午前	各自、講義受講	
(木)	11:00~12:00	Come and Try Netball	Netball 体験
(214)	午後	各自、講義受講	
	午前	各自、講義受講	
3/15	10:00~11:00	Teaching Lab Tour	ラボツアー
(金)	午後	各自、講義受講	
	13:00~14:00	Tokyo Tech Information Session	本学の紹介
		各自、自由行動	
3/16	07:30~19:30	希望者のみ	
(土)		: グレートオーシャンロードツアー	
	21:00	ホテルをチェックアウト・空港へ移動	
3/17	00:40 頃	メルボルン国際空港発	JL774 便・直行
(日)	08:30 頃	成田国際空港着	日本時間

3. オーストラリア全体の概要

3-1. オーストラリアの概要

(1)正式名称と国旗

オーストラリアの正式名称はオーストラリア連邦 (Commonwealth of Australia) である。 国旗は図 2 に示す通りである。左上のイギリスの国旗(ユニオン・ジャックと呼ばれる) はイギリスとの歴史的関係を表し、右半分の5つの星は南十字星を模しており、オーストラ リアが南半球にあることを表している。左下の七稜星はオーストラリアの6つの州と特別 地域を表している。



図 2 オーストラリアの国旗1

(2)州と都市

図 3 に示すようにオーストラリアは 6 つの州とその他の特別地域に分かれている。 ニューサウスウェールズ州 (NSW)、ヴィクトリア州 (VIC)、クイーンズランド州 (QLD)、南オーストラリア州 (SA)、西オーストラリア州 (WA)、タスマニア州 (TAS) の 6 つの州と首都特別地域 (ACT) と北部準州 (NT) などの特別地域がある。

オーストラリアの首都はキャンベラであり、そのほかの主要都市としてシドニー、メルボルン、ブリスベン、パースなどが挙げられる。これらの都市の位置は次項の図 4 に示す。



図 3 オーストラリアの州と特別地域2

¹ https://japan.embassy.gov.au/tkyojapanese/aust_flag.html

² https://au-ryugaku.com/state/

(3)人口と面積

2017 年におけるオーストラリアの人口は 2450 万人であり、同年の日本の人口 1 億 2670 万人と比較するとオーストラリアの人口は日本の人口の約 1/5 となるため、人口は比較的少ないことが分かる。一方で、オーストラリアの面積は 769 万 km^2 であり、世界で 6 番目に大きい国となっている(日本の面積は 37 万 km^2 であり、世界 61 位)。したがって、人口を面積で除した平均の人口密度は 3 人 $/km^2$ となるが、実際には図 4 に示すように主要都市に人口が集中しており、人口密度は地域によって偏りがある。

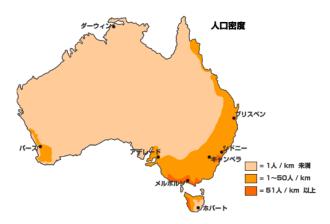


図 4 オーストラリアの都市と人口分布3

(4)環境と生態系

オーストラリアは世界で最も平均標高が低い国であり、最も乾燥した大陸である。また、 南半球に位置するため、1月に真夏が訪れる。大陸全体に様々な気候が分布している。図 5 に示す降水量から分かるように、北部では熱帯、内陸部では乾燥地帯、南部では温帯、沿岸 では亜熱帯が広がっている。

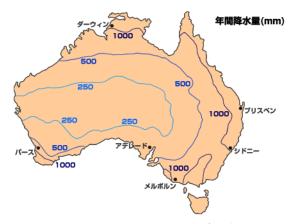


図 5 オーストラリアの降水量4

オーストラリアには特有の動物が多く生息している。よく知られているカンガルーやコ

http://australia.or.jp/_old/discover/chapter01/004.html

⁴ http://australia.or.jp/_old/discover/chapter03/002.html

アラをはじめ、カモノハシ、ハリモグラ、タスマニア・デビル、ウォンバットなど、多くの動物を見ることができる(図 6)。









図 6 オーストラリアの動物たち (左上:コアラ、中央上:ハリネズミ、中央下:ウォンバット、右:カンガルー) ⁵

(5) 言語と民族・宗教

オーストラリアの公用語は英語である。イギリスの英語とアメリカの英語と対比してオーストラリアの英語は Aussie English と呼ばれ、特有の訛りやスラングが存在する。有名な例として「Day」の発音が挙げられる。通常、イギリスやアメリカでは「dei(デイ)」と発音するが、オーストラリアでは「dai(ダイ)」と発音する。スラングに関しては Gas station(ガソリンスタンド)を意味する Servo や Barbeque(バーベキュー)を意味する Barbie など、オーストラリア独自の英語が発展している。

オーストラリアではオーストラリア系とイギリス系の民族で全体の約8割を占めており、 続いてアイルランド系、イタリア系の民族が多い。そのため宗教に関しては、キリスト教徒 が最も多く、人口の約5割がキリスト教を信仰している。

(6)通貨と経済

通貨単位はオーストラリアドル (A\$) とオーストラリアセント (A¢) である (図 7 の写真)。5、10、20、50、100 ドルのポリマー幣と 1、2 ドル、5、10、20、50 セントの硬貨がある。オーストラリアドルと日本円の為替レートは 1 オーストラリアドル \Rightarrow 79 円となっている (2019 年 3 月 4 日 16:52 UTC)。

⁵ https://www.australia.com/ja-jp, https://www.instagram.com/australia/



























図 7 オーストラリアの通貨6

オーストラリアの年間 GDP は 1983 年から 2018 年まで 25 年間、増加し続けてきている。オーストラリアの経済を支える要因の一つとして豊富な資源が挙げられる。石炭、石油、天然ガス、ウランなどに恵まれており、資源大国となっている。特に石炭の輸出量(2017 年)は世界一位であり、全体の輸出量の約 36%を占めている。

(7)教育体制

オーストラリアでは6歳から6年間Primary School (小学校6年) に通い、その後4年間Secondary School (中学校3年+高校1年) に通う。ここまでが義務教育であり、大学や専門学校へ進学する場合は2年間Senior Secondary School (高校の後半2年) に通うことになる。大学に入学した場合、3年間の学士課程と1年または2年間の修士課程(1年間の修士課程はPostgraduate Diploma、2年間の修士課程はMaster と呼ばれる)、3年間の博士課程で学ぶことになる。ただし、これらの教育体制は州により多少異なる。

(8) 観光

オーストラリアは観光産業も盛んであり、多くの歴史的な建築物や自然が織りなす美しい景色が存在する。オーストラリアの中心に位置するエアーズロック(ウルル)やシドニーのオペラハウス、北東岸に広がるグレートバリアリーフ、メルボルンのセント・パトリック大聖堂など世界的に有名な観光地を巡ることができる(図 8)。

⁶ https://au-ryugaku.com/au-money/







図 8 オーストラリアの観光地 (左上:エアーズロック、中央:オペラハウス、右上:グレートバリアリーフ)

3-2. オーストラリアの歴史)

本項では、オーストラリアの歴史について、中世・近世・近代・現代へとさかのぼってい くことにする。

(1)中世以前のオーストラリア(~15世紀)

中世以前のオーストラリアに生活していたのは、先住民族アボリジニの人びとである。彼らは、現在から少なくとも5万年前にはこの大陸に到達しており、狩猟採集生活を営んでいた。生活圏は大陸全土に広がり、18世紀末~19世紀初頭には、その人口は約100万人となって、約500もの民族集団をつくっていたという。また、700もの異なる言語を話していたといわれる。これらの民族集団は、必ずしも定住していたわけではなく、広域を移動しながら集団相互の関係を築き、物々交換システム・共同祭祀システムを形成していたという。

アボリジニの人びとは文字を持たないので、過去の出来事が「記録」として残っていない。 これらの出来事の一部は歌や踊りといった民間伝承という形で、現在にまで伝わっている。

(2) 近世のオーストラリア(16世紀~19世紀初頭)

オーストラリアが「記録」の形で世界史の表舞台に現れるのは、ヨーロッパ人の入植が開始されて以降である。17世紀半ばにタスマニアとニュージーランドを発見したオランダ人のアベル・タスマンは、オーストラリアという陸地の存在を認識していたと考えられるが、ニューギニア島と陸続きであるとの誤った認識を持っていたため、大陸として発見されることはなかったそうである。この後も、数人の冒険家たちがこの大陸周辺を航行し、幾人かは上陸まで行ったが、大陸として認識されることはなかった。

そして、世界一周を成功させたことで有名なジェームズ・クックが、太平洋探検航海(1768

年~1771年の第1次航海)の途上でこの大陸の東部にたどり着き、さらに、この陸地が独立した大陸であることをようやく突き止めた。そして、1770年にイギリスが現在のニューサウスウェールズに対し領有宣言を出し、オーストラリアは正式にイギリスの統治下におかれることになった。

領有宣言を出したイギリスだったが、この大陸に対し、当初は流刑地としての機能を担わせた。1778年1月、シドニー港に到着した護送船第1陣には約750名の囚人が乗せられており、その後、1868年に囚人護送が終了するまで、実に16万人もの囚人がオーストラリアに入植することになったのである。

(3) 近代のオーストラリア (19世紀初頭~20世紀)

こうしてイギリスはオーストラリアを囚人の流刑地として利用しさらに資源の獲得や囚人の雇用確保・更生のため、オーストラリアの開発を進めていったのである。これらの移民の参入に伴い、先住民であるアボリジニとの衝突が起こりながらも、その広大な土地を生かした農業を中心にしてオーストラリアの産業は発展していった。

そして 1851 年に金鉱が発見され、ゴールドラッシュが起こったことで世界中から労働者が増えるとともに得られた莫大な富によって急速に町が発展した。このゴールドラッシュでは経済が潤ったがそれだけではなかった。オーストラリアへの移民の数、特に中国系の労働者が増加した結果、白人労働者と中国系労働者の間で摩擦が生じることになった。この摩擦により、白人は自らの優越を原則とする白豪主義を掲げ有色人種の移住制限を設けるなどした人種差別政策をとることに繋がっていったのである。この白豪主義は 1900 年代半ばまで国全体の政治的思想として機能することになる。

その距離の遠さからイギリスによる直接統治が困難になったため 19 世紀末までに入植者によってオーストラリアには6つの自治政府が作られた。これらの点在した植民地ではそれぞれで独立した議会や法律が存在していたが、互いに共通の利益を守り、そして広げていくために連携の提案がなされた。そこで 1901 年にはこの 6 つの州が集まり、憲法草案をまとめて更にこれをイギリス政府が承認することでオーストラリア国家が誕生した。

1914年に第一次世界大戦が起こるとオーストラリアはイギリスとの関係の深さから参戦することになる。この戦争により約6万人の死者を出すなど大きな犠牲を払うことになった。また戦争終了後には国際連盟の加盟が認められ国際社会での地位を確立していった。第二次世界大戦でもオーストラリアは参戦し連合軍の勝利に貢献した。この戦争で初めて本土への襲撃を受けることになった。これにより侵略への脆弱性を感じたこともありその後およそ200カ国からの移民を受け入れるようになった。

(4) 現代のオーストラリア (20世紀~)

第二次世界大戦が終結すると、オーストラリアは好景気を迎えた。小麦や羊毛などの第 一次産業の好調に加え、鉄鉱石などの資源、製造業でも業績を上げていった。1950 年代に は、鉱物資源の開発や水力発電事業など、国家的なプロジェクトが行われた。また、社会保障の拡充と通信の発達は目覚しく、この時期にテレビも登場した。

スポーツ分野でもオーストラリアは注目された。1956年、南半球で初めてのオリンピックがメルボルンで開催され、国際的に知名度がアップした。

1960年代に入ってくると、イギリスの影響が弱まり、アメリカやアジアなど、広く世界と関わりを持つようになってきた。戦後、移民政策がさらに推進され、さまざまな国の出身者が移住してきた。先住民や移民を含めて、すべての国民が平等であることを政府が公約した。現在では、多文化が共生した社会になっている。

また、日本との関係も多々ある。1995年、日本はオーストラリアとパートナーシップに関する共同宣言を発表した。この取り決めで両国は、より深い相互理解とともに、二国間・多国間・また地域的な様々の範囲の共通した問題解決のための相互協力を推し進めることで合意した。

2001年には、21世紀の新しい国際社会の中で、日豪両国が協力して具体的に何ができるかを話し合う会議がシドニーで開かれ、幅広い分野での政策を提言した「日豪の創造的パートナーシップのためのシドニー宣言」が発表された。この会議の成功に続いて、2002年には東京で「創造的パートナーシップのための日豪会議」が開かれ、最近の国際情勢の変化が、東アジアや太平洋地域に与えた影響、両国がこの地域のパートナーとして果たすべき役割について話し合われた。

また、各州と都道府県、また自治体や港町等の間で結ばれている姉妹関係は 100 を超えた。そして、多数の合弁企業がオーストラリアに設立され、両国の人々が共に働くことも一般化してきた。近年は毎年 80 万人以上もの日本人観光客がオーストラリアを訪れている。このように、両国間の貿易や観光が盛んになったことで、 オーストラリアでは日本語教育に重点が置かれるようになり、現在、日本語は小学校も含め、大多数の学校で学習科目に取り上げられている。

3-3. オーストラリアの人物

(1) Banjo (Andrew Barton Paterson) (1864-1941)

バンジョーはオーストラリア、ニューサウスウェールズ州ナランブラ生まれの詩人、ジャーナリストである。バンジョーはペンネームで、本名はアンドルー・バートン・パターソン。オーストラリア第2の国歌と言われる「ウォルシング・マティルダ (Waltzing Matilda)」(後に述べる)の作詞者として有名で、現在のオーストラリア 10 ドル紙幣の表面に肖像が使われている。

バンジョーの作品は田舎の自然や、荒々しく勇敢な男性像を題材としており、代表作は「ウォルシング・マティルダ」以外に、「スノーウィー川から来た男(The Man from Snowy River and Other Verses)」、「オーヴァフロウのクランシー(Clancy of the Overflow)」などがあげられる。

代表作の「ウォルシング・マティルダ」は広くオーストラリア国民に愛され、オリンピックでも歌われている。その曲調は陽気で明るく、オーストラリアの原風景を思わせるが、歌詞のあらすじは「貧しい放浪者が羊泥棒をし、警察に捕まりそうになって沼に飛び込んで自殺した」という衝撃的なものである。さらに曲の最後は「his ghost may be heard as it sings in the Billabong "Who'll come a-waltzing Matilda with me? (沼から彼の幽霊の歌声が聞こえてくるだろう「私と一緒に旅する人はいないか?」と。)」という怪談のような歌詞だ。そのような歌が第2の国歌と言われているのは不思議に思われるが、この歌は、権力には屈しないというオーストラリア国民の反骨精神や、原風景で自由気ままに暮らすことへの憧れを表しているようである。すべての歌詞はここでは紹介できないが、興味があればぜひ調べてみて欲しい。

(2) Max Dupain (1911~1992)

Max Dupain はオーストラリア、シドニー出身の写真家である。オーストラリアを代表する写真家であり、モダニスト。1930 年代は広告写真、ファッション写真を中心に活動しており、1934 年にはシドニーにスタジオを構えた。30 年代の彼の作品にはモダニストとしての実践が多くみられる。アメリカ出身の写真家 Man Ray をはじめとするシュルレアリストたちの実践に影響を受けたため、30 年代後半から 5 年ほど、シュルレアリスムに傾倒した作品を残している("Surrealist study"(1938)、" Spliced invasion of the three dimensions"(1938)など)。

第二次世界大戦中はオーストラリア軍のカモフラージュ部隊に所属している。また、戦後 2年間はオーストラリア情報局で働いた。

作家としての活動を再開すると、風景や建築物を写した作品に力を注いだ。特に Samuel Lipson、 Sydney Ancher、 Harry Seidler の建築を撮影した作品が多い。1958 年から 1973 年には、オペラハウスの建造等のドキュメンタリーを撮影している。また、シドニーの海岸を撮ったことでも有名であり、特に 1937 年に撮影され、70 年代にプリントされた "The

Sunbaker"はオーストラリアを象徴する写真の一つとしても知られている。

オーストラリア国立美術館 (NGA) には、彼の作品が多く所蔵されており、そのうちの大半がインターネット上で公開されている。1930 年代の、シュルレアリスム的実践から、戦後の建築写真、また70年代の静物写真まで、鑑賞することができる。また、ニューサウスウェールズ州立美術館にも多数、彼の作品が所蔵されている。こちらもインターネットアーカイブで鑑賞することができる。

Dupain はシドニーにあった彼のスタジオを 81 歳で亡くなるまで経営していた。1982 年 には大英帝国勲章 (OBE) を受賞している。

(3) Howard Walter Florey (1898~1968)

ハワード・フローリーはオーストラリアのアデレードで生まれた生理学者である。共同研究者のエルンスト・ボリス・チェーンと共に、フレミングが発見したペニシリンを薬剤として応用した功績でノーベル医学賞を受賞した。もともとペニシリンの発見者であるフレミングが実用化に向けた課題として残した「ペニシリンの精製」、すなわち大量生産の方法の確立に成功したのがハワード・フローリーとエルンスト・ボリス・チェーンである。しかしこれは第二次世界大戦中の出来事であったため、戦時中においては軍の機密事項として扱われ、民間にその製法が広まったのは戦後のことである。ペニシリンが多くの連合国兵士の命を救ったことから、フローリーは1965年に男爵として一代貴族に叙された。

また、フローリーは教育者としても重要な役割を果たした。1948年から1955年にかけて、キャンベラにあるジョン・カーティン医療研究所でアドバイザーを務めた。また1962年にはオックスフォード大学のクイーンズ・カレッジの学長も務め、学内にフローリー・ビルという名の宿泊棟が建設された。その後オーストラリア国立大学の設立にも携わり、同大学の学長も務めた。

このような業績から、オーストラリア国内においては、50 オーストラリアドル紙幣の肖像に使われる、キャンベラ郊外の町の名前の由来になるなど各方面で讃えられることとなった。



図 950 オーストラリアドル紙幣

4. メルボルンの概要

4-1. メルボルンの基礎データ

ここでは広い意味でのメルボルン (Greater Melbourne) ではなく、City of Melbourne についてのみ述べる。

(1)地理・人口

メルボルンはオーストラリアの南東部、ヴィクトリア州の州都で、都市部の人口は 15 万 8923 人で、面積は 37. 7km^2 で世田谷区 58. 05km^2 よりも少し狭く、世田谷区の約 90 万人の約 6 分の 1 程度である。



図 10 オーストラリア内でのメルボルンの位置(Google Map から地図を参照)

(2) 政治体制

メルボルンの市議会はLord Mayor、Deputy mayor がそれぞれ一人ずつと九人の評議員からなっており、全員選挙で選ばれる。現在のLord Mayor である Sally Capp はメルボルンの Load Mayor 初の女性である。一方行政組織はトップの Chief Executive Officer (CEO と略される)を筆頭とする Executive Leadership Team 11人と1300人のスタッフによって成り立っており、市議会の決定の実行機関としての役割と、議会への助言をする役割を担っている。

(3) 経済、産業

先進国の大都市らしく、メルボルン内での仕事のうち最大のものは専門的、科学的、あるいは技術的なサービスを提供するもので、次点が金融、保険業である。

また、金融に関しては 2018 年の Global Financial Centre Index によると金融都市としての順位は世界 20 位と日本の大阪 22 位よりも高い。

(4) 文化

芸術活動に関心が高く、市では現代アートやアボリジニの作品を含む 8000 以上もの文化 財を 1850 年代から収集している。またそれらは 頻繁に市のギャラリーで公開される。また、Arts House という Web サイトではメルボルン内で行われる芸術に関わるイベントを紹介しており芸術系のイベントが絶え間なく開催されていることが伺える。

またストリートアートが盛んで建物のオーナーが許可をした上での壁への作品制作が多く行われている。

4-2. メルボルンの歴史

(1) メルボルンの成り立ち

メルボルンはもともと、先住民アボリジニのクリン族が属する、5つの言語に分かれる 部族の人々が暮らしていた。そして、最初の移住者ジョン・バットマンをはじめとする移 民が入植し、50のテント生活から、1839年には人口70万人を超える街へと急成長を遂げ た。

(2)メルボルンの歴史的な建造物

旧メルボルン監獄

メルボルンの歴史的建造物旧メルボルン監獄は、ゴールドラッシュ時代に大量の移民が やってきたことで増加した犯罪者に対処するため建設された。

1842年から1929年までにここで135人が実際に処刑された。メルボルンで最も古くから残る建物のひとつで、訪れる価値のある観光スポットとして、数々のツーリズム賞を受賞してきた。拷問道具、処刑道具が展示され、実際に使用された独房も公開されている。



図 11 旧メルボルン監獄7

⁷ https://4travel.jp/travelogue/11304643

フリンダース・ストリート駅

フリンダース・ストリート駅はフリンダース・ストリートとスワンストンストリートの 交差点に位置する、1日約25万人が利用するターミナル駅である。

オーストラリア国内初の駅として 1854 年に完成し、この駅を終着点にしてメルボルン 郊外への電車が出ている。

青いメルボルンの空に映えるエドワード王朝風の黄色がかった外観の建物は国内外から広く愛され、1909年に完成したドームのある古い駅舎は、トラムと並び、メルボルンのシンボルとなっている。また、玄関に時計が並ぶ駅舎はメルボルンで最も有名な建物で、ヴィクトリア州の文化遺産にも登録されている。



図 12 フリンダース・ストリート駅8

セント・パトリック大聖堂

セント・パトリック大聖堂は、ヴィクトリア州のローマ・カトリック総本山とされる大 聖堂である。

ピューリタン思想に影響を受けた荘厳な造りで、オーストラリア最大のゴシック建築で もある。

シドニーのセントメリーズ大聖堂を担当したウィリアム・ウォーデルが設計したこの大 聖堂は 1858 年に建設が始まったのだが、労働者が金塊探しで不足したり、不況で滞った りして、最終的に完成したのは 1939 年であり、80 年以上の歳月をかけて完成された。



図 13 セント・パトリック大聖堂9

_

⁸ https://www.urban.com.au/forum/flinders-street-station

⁹ https://schoolwith.me/columns/31831

4-3. メルボルンの人物

メルボルン出身の有名人は幅広いジャンルにおり、以下ではその中の3人を紹介する。

(1) Cate Blanchett (1969-)

オーストラリアの演劇学校で演技を学び、1994年に女優として映 画デビューする。1998年に公開された「ELIZABETH」でエリザベス1 世役を演じると、その演技が高評価を受け、ゴールデングローブ賞の 主演女優賞を受賞し、アカデミー賞の主演女優賞に初ノミネートされ ることとなった。その後も「THE LORD OF THE RINGS」や「THE **図 14 Cate Blanchett** AVIATOR」などで多彩な役柄を演じ、数々の受賞歴を持つ。そして 2017 年にはオーストラ

リア勲章「Companion of the Order of Australia(AC)」を受勲している。(図 14¹⁰)

(2) Kylie Ann Minogue (1968-)

彼女は19歳の時に歌手としてデビューし、チャート上位の常連と して数々の賞を受賞した経歴を持つ。2001年に渡米後、シングル 「Come into My World」でグラミー賞ベスト・ダンス・レコーディン グ賞を受賞、その他4部門においてもノミネートされる快挙を成し遂 げる。そして 2011 年には、オーストラリア・レコード産業協会 (ARIA)の殿堂入りを果たし、2012年に行われた、オーストラリアで最 も優秀なパフォーマーに送られる「the Helpmann Awards」では、ベ



図 15 Kylie Ann Minogue

スト・オーストラリアン・コンテンポラリー・コンサート賞を受賞した。また、2000年の シドニー五輪開会式でもパフォーマンスを披露した。(図 1511)

(3) Peter Singer (1946-)

彼は「世界で最も影響力のある現代哲学者の一人」と呼ばれるほど 優れた哲学者であり、また倫理学者でもある。メルボルン大学とオッ クスフォード大学で学び、イギリス、アメリカ、オーストラリアで教 授として講師を務めたのち、プリンストン大学において生命倫理学教 授となり現在に至る。主に、動物の持つ権利やそれに伴う生命倫理問 図 16 Peter Singer



題についての研究を行い、「Animal Liberation」など、著書も多数記している。実生活でも 1971年より肉を食べるのをやめるなどの実践的な動物保護運動を行ったり、「The Life You Can Save」という組織を立ち上げ、貧困に苦しむ人々の生活向上のためにできることについ ての彼の考えを広める運動も行ったりしている。(図 16¹²)

¹⁰ https://www.imdb.com/name/nm0000949/

¹¹ https://eiga.com/person/23816/

¹² https://petersinger.info/photos

5. メルボルンでの体験

5-1. メルボルン大学 Parkville Campus の概要

今回私たちが訪問したのは Parkville キャンパスである。シティと呼ばれるメルボルンの中心部から少し北に位置し、東西に約 500m、南北に約 1km の広大な敷地をもつ(大岡山キャンパスの緑が丘地区から石川台地区までも約 1km)。北側は学生寮などが立ち並ぶ、学生の生活エリア、南側は講義室や研究室などが立ち並ぶ学術エリア、というように分かれている(右図)。キャンパス内には図書館が複数存在し、建築や法律など、それぞれの専門に特化したものも設置されている。主要な図書館はBAILLIEU LIBRARY(図 18)であり、その所蔵巻数は膨大で学生が使える PC、そしてグループで議論できるミーティングルームが多数設置されている。ミーティングルームは予約制で、使用する 3 日前に予約しないと使用できないほど学生や教授たちが日々ここで議論を繰り広げている。

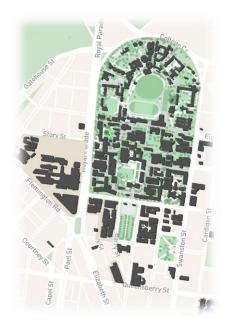


図 17 Parkville Campus の地図 (Lost On Campus より)



図 18 多くの学生が利用する BAILLIEU LIBRARY



図 19 キャンパス内の印象的な建物

キャンパス内には新しく近代的でスタイリッシュな建物と、まるで映画に出てくるような歴史的建造物が混在しており、とても美しいキャンパスであった(図 19)。

東工大の学食のようなものとして、Union House という建物があるが、東工大とは異なりサブウェイなどのカフェが集まるフードコートのようになっていて、昼食時には多くの学生で賑わっていた。また、構内のいたるところにカフェがあり、軽食やコーヒーを購入できた。芝生やベンチも多いため、そこでランチを楽しむ学生も多くみられた。



図 20 Union House の様子

学生数が多く、収容人数の問題から講義ごとの移動が長距離で大変になることが多々ある。広い敷地だが、「Lost On Campus」という地図アプリで講義室やカフェ、トイレを探すことができ、案内板も各所に設置されているため、比較的迷うことなく過ごすことができた。学生の多くは徒歩で構内を移動していた。

5-2. 講義概要

メルボルン大学では、自分たちの専門分野によって"Biomedical, Chemical & Biomolecular Materials Engineering"と"Mechanical"の 2 つのコースに分かれてそれぞれメルボルン大学の学生と一緒に講義を受けた。また、コース内で決められた講義以外にも各自で興味のある授業にも出席した。以下ではコース別に受講した講義の概要やその感想について記している。続いて両コースに共通していた講義、そしてその他の講義として各々興味をもって受講した講義についても同様に述べている。

(1) Biomedical, Chemical & Biomolecular Materials Engineering コース

• Circuits and Systems (BMEN30006)

この授業は、biomedical の授業だったので、神経系の回路と伝達の仕組みについての講義を行うのかと思っていたのだが、実際には純粋な電気回路の話であり、驚かされた。授業で解説されていたのは、複雑な電気回路を解く際に用いられる節点電位法についてであった。まず、どのように解くのかを説明し、そのあとは実際に回路の問題を出し、後半の30分近くは演習であった。演習では、教授が学生に質問があるか聞いて回り、かなり質問をしやすい雰囲気であったと感じる。答え合わせでは学生にどんな式が成り立つかを聞いてから答えを発表していた。全体的に学生の発言がしやすいように授業が組み立てられていた。

- Soft Matter Engineering (BMEN90012)

本講義は修士課程の学生向けで、1コマ1時間の授業だった。内容としては「ファンデルワールスの状態式の復習」と「二原子間の電気的関係」であった。この講義に関しては、一部未知の専門用語が登場したが、特に後者に関しては既視感のある内容(1年の後期における量子化学基礎で似たようなものを扱ったように思える)であった。教官は非常に積極的に授業を展開し、学生に対し繰り返し質問を投げかけていた。しかし、お昼を過ぎてあまり時間がたっていない授業であったことも相まって、学生の間にはどことなく気の抜けた空気が漂っており、学生の反応が悪くて教官は困惑しているように見えた。二つとなりに座った学生が、授業にココナッツを持ち込んで食べていたのが印象的だった。

- Biomedical Engineering Management (BMEN90019)

本講義は修士課程の学生向けであり、1コマ2時間×週2回で構成されている。内容は「組織構造の基礎を理解する」というものであり、The Melbourne Health Executive Management Team や GM の例を引きながら組織の構造とはどのようなものかを学んでいく形になっていた。授業の冒頭に"LIFE SCIENCE METAPHOR"と題して、組織構造を細分化してみていくと生物の構造と似ている、という説明が行われており、興味深かった。

Medical Imaging (BMEN90021)

本講義は修士課程の学生向けであり、1時間のLecture と3時間のWorkshopがセットになっているものである。内容は「元画像にフィルターをかけて処理し、医療関係者が病気の診断などに利用するための画像を作成する」というものであった。Gaussian フィルターやLow-pass/High-pass フィルターが画像に対してどのように作用するのか、実際の脳の画像や胸部画像を用いて紹介した。個人的にImageJを利用する機会があったため、授業内容の雰囲気をつかむことはできたが、事前知識がなければ厳しい授業であったと感じた。

Clinical Trials and regulation (BMEN90026)

クリニカルという名前が入っていたので、臨床試験の方法についてかと思っていたが、授業を受けてみると、統計学の授業であったと思う。Gamma distribution (ガンマ分布)について扱った。私は統計についての知識はあまりないので、詳しい話はあまりわからなかったが、存在確率についての議論をしていたことはわかった。授業はMATLABを使って、変数が変化すると確率密度関数がどのように変化するかを示したり、例題をいくつか出したりしていて、学生にわかりやすいように工夫されていたと感じた。

(2) Mechanical コース

Mechanical Design (MCEN30014)

デザインのためのアプローチについての講義だった。新しいアイデアを産むときに、そのアイデアのメリットや実用性を考える必要はないと教授は主張していた。他にも、複数の異なる分野のチームが同時に小型の飛行機の設計をするときに、分野毎の特色が強く現れるのでそれを見比べる手法についても話していた。

Mechanics and Materials (MCEN30017)

材料力学の授業であり、私が受けた回では、その場で次々に力学の問題の解説をしていくという講義内容であった。講義スタイルは先生が実際に紙に解説を書いていき、それがスクリーンに映し出されるというものである。今までの講義では学生たちは自分のパソコンにスライドをダウンロードして授業を受ける、というような様子が多くみられたが、この講義では皆ノートを用いて授業内容を書きとっていくという学生がほとんどであったように思われた。

材料に負荷がかかった時の力の作用関係を知るために、Virtual Work (仮想仕事)という考えを用いた導出方法を学んだ。私はこの方法を使った力学の計算には慣れていなかったが、先生が書いてくれる図が分かりやすかったことと、式変形が丁寧であったことから、比較的理解しやすかった。講義中に出てきた単語としては、deflection (たわみ)や strain (歪み)などの今まで私が東工大で受けてきた授業の中でも頻繁に出てきた単語も多かったため、どのような問題設定がされているのかも分かりやすかった。

Thermodynamics and Fluid Mechanics (MCEN30018)

本講義では熱力学の第1、2 法則、エネルギーの構成(内部エネルギーと運動エネルギー、ポテンシャルエネルギーからなる)、仕事の種類(ばね、トルク、ピストンの圧力などによる仕事)、理想気体の内部エネルギーは温度のみに依存するというジュールの法則、そして比熱の定義など、熱力学を学ぶ上で初めに知っておくべき重要な概念が説明されていた。授業は前に映し出されたパワーポイントに沿って進められた。実際に英語で授業を受けて、英語のテクニカルタームを学ぶ良い機会となった。

Systems Modelling and Analysis (MCEN30020)

微分係数の多変数バージョンであるヤコビ行列を与えられたモデルから求めて、それを 元にシステムの安定性を解釈することを要点に置いていた。東工大で受けている授業と範 囲が近く、受けていて面白かった。

Materials (MCEN90014)

機械工学を学ぶ学生向けの、材料について幅広く扱う講義だった。1階と2階が吹き抜けの大きな階段状の講義室で、150人ほどの学生でいっぱいだった。修士学生向けの講義であったが、私たちが参加した回は全率固溶型および共晶型状態図の見方と組織について説明していて、材料系2年生の科目「金属の状態図と相安定」で学んでいたため内容は理解できた。先生が説明するのではなく、動画を見て、学生が質問できる時間を設けるという形式だった。動画は、コインの製造方法を見せながら状態図の読み方を説明していて、わかりやすいと感じた。また、同じ50分の講義の中で拡散についても扱っていて、進度が早いと感じた。

- Thermodynamics (MCEN90015)

熱力学の講義である。内容は熱機関に用いられるサイクルの一種であるブレイトンサイクルについての説明であった。修士学生向けの講義であったが機械系では学士 2 年次に熱力学を東工大でも学ぶのでさほど理解は難しくなかった。スライドを用いず、教授がその場で手元の紙にペンで式を書き連ねてそれを講義室前面の壁に投影していた。かなり丁寧に書き並べていたので教科書など余計なものを見ないで済む分、気を散らす事なく学ぶことができる。

- Advanced Fluid Dynamics (MCEN90018)

流体の流れを実験的に追跡する方法に関する授業で、PIV(Particle Image Velocity)と呼ばれる方法の解説を受けた。流体に細かい粒子を撒き、カメラを露光状態にしたのち、僅かな時間にだけ強力なレーザーを当て、その瞬間の像の写真を得る作業を繰り返して得た画像を解析すると流体の流れを把握できるようだ。特徴的だと感じたのはレーザーのパワ

ーやカメラの性能などについて具体的な説明があったことだ。修士の授業ということもあり実際に実験で扱うことも想定しているかのような授業だと感じた。最後の方では画像処理の部分に関わる部分で重要となる数学の説明として Cross-correlation(相互相関関数という共分散に近いもの)というものを学んだ。次回はそれを正規化するところから始めるようだ。余談だが翌日の見学した水力学ラボでは実際にこの PIV の装置を使って水の流れを可視化していたためいい予習になった。

- Dynamics (MCEN90038)

本講義では、回転行列を用いた位置ベクトルの求め方が説明されていた。行列を用いて機械的に位置ベクトルを求められるため、コンピュータを用いた計算が容易となる。特に、本講義では行列計算のソフトウェアとして MATLAB が紹介されていた。現代においては、数値計算はコンピュータに任せるため、物理モデルを構築したり計算する式を記述したりすることが私たち人間にとって重要なことであり、手で解いた計算結果よりも計算する式を立てる過程の重要性を強調していた。このように工学部の学生に対して実際の研究手法に適した実践的な教育がなされており、素晴らしい授業であった。

講義は配付資料を適宜参照しながら、前に映し出されたパワーポイントに沿って進められた。多くの例題を解きながら立式の理解を深めていくスタンスの講義であった。それぞれの例題を解き終わった後には質問の時間が設けられ、そこでは多くの学生が手を挙げ、抱いた疑問をその場で解決しようとする意志が強く感じ取れた。

Engineering Computation (COMP20005)

私たち以外の学生が授業 5 分前になっても 1 人しかいなかった。その人に今日この授業 はあるかないかを聞いたところ、その学生はあると答えた。しかし、授業時間になっても先 生も学生も現れず、私達は静かに教室を去った。

- Fluid Mechanics (ENGR30002)

この講義では流体にはたらく垂直応力とせん断応力の説明、および固体と流体の比較のおさらいから始まり、その後は層流と乱流の議論がなされた。層流と乱流間の遷移の指標であるレイノルズ数を説明する際に、どの3つの要素が重要になるかという問いかけが初めにあった。それらは、当然のことながら流体の速度、粘性、幾何形状(代表長さ)の3つであるが、この講義では、あえてレイノルズ数の定義を見せる前に学生にそれら考えさせていたのが印象的であった。最後には非圧縮流体における質量保存(連続の式)の説明がなされて、与えられた条件から管の出口の流速を求める簡単な演習問題をいくつか解いて、内容をブラッシュアップした。

(3) 両コース共通の講義

Engineering Systems Design1 (ENGR10004)

前半は新入生に向けたクラブ紹介で、スポーツクラブは1つもなく、全て文化系のクラブだった。後半は、圧力についての授業で圧力の色々な単位や飛行機の中の圧力を紹介していた。また、水圧の計算の仕方を教え、宿題にしていた。

Engineering Mechanics (ENGR20004)

本講義では工業力学の基礎として、それぞれの部材にはたらく力を求める手順が説明されていた。まず構造物をフリーボディダイアグラム(FBD)で1つの部材に分解して、その後それぞれの部材に対して並進力と力のモーメントのつり合いを考え、未知の力の大きさを求めるという基礎的な手順が順を追って丁寧に説明されていた。講義中には多くの演習問題が例として挙げられ、解きながら理解するという理念で講義が行われていた。いくつかの演習では、途中でアプリを用いた4択の投票が実施され、その場でクラス全体の理解度の調査がなされていた。

またこの講義が行われた Copland Theatre はメルボルン大学でも最大級の講義室で、講義室の大きさとそのデザイン性に圧倒された(下図)。

授業後に先生が講義室を出ようとすると、講義室の出口で多くの学生が資料片手に先生 に質問をする様子が非常に印象的で、このような学問に対する熱意は自分も見習わなけれ ばならないと感じた。



図 21 Copland Theatre の様子

:膨大な数の席と巨大なスクリーン、そして現代的な天井が印象的である

Engineering Practice and Communication (ENGR90021)

ガイダンスのような授業であり、これから論文を書いたり読んだりしていくうえでの図書館の利用方法や論文へのアクセス方法の説明があった。この辺りは東工大にも似ており、超短期留学の我々には関係のない話であったから正直退屈であった。しかし途中で非常に興味深く、今後役に立つだろうツールを紹介された。Grammarly というソフトウェアだ。自分の書いた英文の文法チェックをしてくれるようだ。デスクトップ版のほかにブラウザ版やMicrosoft Office 系ソフトとの連携ができるようで、このソフトを使うことを強く推奨していた。調べたところ、残念ながら東工大で使用している人が多い Latex には対応していないようだ。Linux にも対応していない。しかし、ブラウザ版を試してみたところ使い勝手が非常に良いと感じたため今後、英文を書く機会には積極的に使っていきたい。様々な国から留学生の来るメルボルン大学らしいハックの紹介の授業だと感じた。

Australia Now (MULT20013)

本講義は学士課程2年生向けである。特に留学生など、オーストラリアの現状についてあまり知識を持たない学生に対して開講されている授業だけあって、講義を受けている学生の多くが留学生であったように見受けられた。内容は「政治と階級 Politics and Class」であり、講義冒頭に1本の動画(とあるミドルクラスの家族の物語)を見た後、国内の労働環境や労働者の権利、州政府の三権分立のしくみについて解説したり、オーストラリアの政党について一つ一つ解説をおこなったりした。選挙管理委員会が単記投票方式の欠点を明確に表した漫画をつくって投票方式を解説していて驚いた。また、投票権を持つのに投票に行かないと罰金として\$20を取られることが紹介され、どの国でも投票率を向上させることは課題となっているのだなと感じた。

(4) その他の講義

- Computer Systems (COMP30023)

あえて専門外の授業に参加してみようとして受けたコンピュータに関する授業だった。 我々が受けた授業の前の授業までですでに TCP / IP 通信と HTTP についての説明が終わっていたようで、その知識がある前提で TCP/IP 通信のアプリケーション層の一種である FTP(file transfer protocol) と SMTP(simple mail transfer protocol) を学習した。

前提となる TCP/IP 通信がよくわからない状態で授業に参加してしまったわけだが、アプリケーション層でのプロトコルの詳しい概要をスライドで説明したあとに、Alice と Bob という架空の人物同士のやり取りを例にとって2つの異なるプロトコルをわかりやすく説明してくれた。2回目の授業では DNS プロトコルという、ホストネームから IP アドレスを調べるためのプロトコルを学んだあとにバージョン管理システム Git の紹介と他のバージョン管理システムとの違いについての説明があった。 DNS の説明でも同様に IP アドレスを問い合わせるときの流れについてイラストを用いて説明してもらえた。

Machine Learning (COMP30027)

$$\hat{c} = \arg\max_{c_i \in C} P(c_i | T) = \arg\max_{c_i \in C} \frac{P(T | c_i)P(c_i)}{P(T)}$$

私が受けた時にはすでに四回目の講義であったため、授業最初のほうはいきなり上記のような数式がでてきて、記号の定義と単語の意味が分からず苦労した。しかし、具体例付きで説明されるため授業の後半になってくると前半に言われていた内容が少しずつ分かってくるといった感じだった。機械学習といっても確率統計の授業のような感じであったためComputer Science の専攻でない私でも受けやすい授業だった。

Bayes の定理の復習から始まり、Conditional independence assumption という近似のための仮定を習いそれらをもとに Naïve Bayes Learner を学習していくといった授業だった。病院に訪れた人の症状から風邪かインフルエンザかを診断するという具体例付きで説明されたためただ抽象的な概念ばかりをやるだけよりずっとわかりやすかった。課題として実際に Naive Bayes 分類器の作成が課されているようであった。プログラミング言語はpython 指定であり、この手の分野で扱う世界標準の言語はやはり python なのかと再確認できた。

- Electronic and Magnetic Materials (MREN90003)

材料の電気的、磁気的および光学的性質に関する講義だった。受けていた学生は他の講義と比べてとても少なく、自分たち以外には10人以下しかいなかった。修士学生向けの講義だが、学期のはじめの頃だったからか、その内容は東工大では理系教養の電磁気学基礎で扱うような、ボーアの原子モデルやバルマー系列などだったため、講義内容は理解することができた。雰囲気はとても和やかで、先生が頻繁に学生に質問を投げかけ、それに答えるといった様子が見られた。プロジェクターの調子が悪かったようで、先生がホワイトボードに書いていく形式だったが、現地学生は講義資料をパソコンで見ながら講義を受けていた。

Reactivity and Mechanism (CHEM30016)

私の受けた回では、振動に対するボルツマン分布、調和振動子の内部エネルギー、分子スペクトルにおける温度効果などについてが主なテーマであった。この講義には東工大で勉強したことのある量子化学や統計力学の内容と似ている箇所があり、一度学んだことのある内容を含んでいた。そのため、言語は異なるものの、何について説明をしているかなどの理解はしやすかった。特に、内部エネルギーやエントロピーを表す式は日本と共通の表し方であり、日本での表し方との対応関係を考える必要がなく、話についていくことができた。

先生はスクリーンに講義内容のスライドを映し、学生たちはそのスライドを自分のパソコンに各自ダウンロードして授業を受けている様子であった。また、講義中でも随時質問を受け付けており、疑問に思ったことはその場で質問するという積極的な学生たちの姿が見られた。

- Biochemistry in Agricultural System (AGRI20043)

農業システムにおける生物化学の内容を扱うことを期待していたが実際に自分が受けた 授業は酵素についての内容をずっと扱っており農業に関しては触れられなかった。2年生 向けの授業であったため酵素の概要から始まり、その特徴から分類、ミカエリス・メンテン 式の導入、反応の仕組みの紹介などをとり扱っていた。自分はすでに一度やっていた内容で あったためほとんど理解できたが、東工大の授業では90分以上はかけて行う内容を50 分で扱っていたので授業の進行速度の速さを強く実感した。重要なところをさらりと触る だけで授業が進んでいくので初めて内容を学ぶ学生には理解が難しいのではないかと感じ た。

Microbiology in Agriculture (AGRI20044)

本講義は学士課程2年生向けである。内容は「DNA・RNA を介した遺伝と水平伝搬」である。授業ではまず、水平伝搬に3種の類型があることを示したうえで、2011年に欧州で大流行した病原性大腸菌がどのようにして病原性および薬剤耐性を獲得していったのかをプラスミドの移行や融合といった水平伝搬の観点から説明していた。ここで特徴的だったのは大腸菌が作物に乗って欧州各国に広がっていく流れを、作物の流通過程の図を交えて説明していたことである。農学系の授業であるにもかかわらず、作物がどのようにして運ばれて病気のもととなったのかについて紹介していて興味深かった。そして、最後にPCRのしくみについて説明していた。その際、教官は学生に対し、PCRについてちゃんとわかっているか、と質問を投げかけて、学生の反応が悪かったため解説を行っており、学生の状況を把握しながらその都度授業を変える姿勢が興味深かった。

- Advanced Solid Mechanics (MCEN90029)

本講義は修士課程の学生向けであり、1コマ1時間で構成されている。実のところ、講義室を間違えて入ってしまい、授業が始まってから間違いに気づいたが、これも何かの縁だと考えて受けた授業であった。内容は「回転図形の歪みについて余弦定理を駆使しながら計算する」というようなものであったかと思う(メモは取っていたが、気が動転していて実際の教官の話をあまり覚えていない)。例としては長方形を平行四辺形に変形したとき、どこがどのように歪むのか計算していた。教官が修士課程の学生に対して余弦定理とは何かを説明しており、重要な個所は基礎から説明する、という姿勢が徹底されていて驚いた。

Japanese Through the Media (JAPN20018)

本講義は日本の新聞やネット記事のようなメディアを読み進めながら、アカデミックな日本語の勉強と文章を構成する能力の育成を目指すものであった。参加した講義では日本で流行している"Vチューバー"の記事が取り上げられた。記事に書かれた文章の要約を行い、それについて自身の意見を議論した。その他には、学生たちが日本に関するニュース記事を1人1つ持ちよってその概要と自身の見解を発表した。日本人であり、世界最高齢でおられた田中さんの話や横倒しになった京都の巨大こけしなど、様々な出来事に関してお互いの感想を共有した。講義は全て日本語で行われており、流暢な日本語で議論する学生の姿が印象的であった。2時間みっちり日本語で読んで書いて話すというハードな講義であったが、論理的に日本語で議論する能力を養うには大変よい講義であった。

日本人が日本語を学ぶ講義に参加する機会は少なく、非常に新鮮で、自身の英語学習と 置き換えてみると様々な発見があり有益な時間であった。

Crime and Culture (CRIM30006)

映画やテレビドラマ中で表象される犯罪に焦点を当て、犯罪と文化の関係について探求するという科目。出席した講義は、会話の分析と物語の構造がテーマだった。リアリズム、構造主義などの思想が導入されたり、実例が提示されたり、権威の残した言葉の引用が紹介されたりと、情報量が非常に多い印象を受けた。また、講義中にWEBサービスを使用し、学生にアンケートを取る場面があり、インタラクティブな講義が展開されている点も新鮮であった。

Power (MULT10018)

出席した第二回は、権力がどのように形成され、また維持されているのかを論じる講義であった。また、イギリスの階級社会におけるアリストクラッツの例を挙げ、階級社会における権力が維持される実例を示していた。また、権力に対する正統派マルクス主義の見解を紹介し、その維持のされ方および労働者階級の人々によりそれがどのように認められていくのかを論じる講義であった。

Quantum Physics (PHYC30018)

学部 3 年生向けの量子力学の科目。基本的な方程式から導出される別の方程式の物理的な意味や、それらの応用の仕方などを追っていく、オーソドックスな物理学の講義であった。 内容は基本というよりは、発展の部分であったので、すべてを理解することは難しかったが、 それでもある程度講義を追っていくことができた。プレゼンによる授業が主流である中、板 書による講義であったことも、理解しやすかった理由のひとつであろう。

· Biological Psychology (PSYC20006)

2年生向けの生物学的心理学の授業であり、自分が受けた授業では仮説の検証方法である仮説検定、その中でも特に t 検定についての話を取り扱っていた。心理学の実験においてこの仮説検定を頻繁に用いるということであったためにこの内容を取り扱っているようであった。この t 検定の考え方自体は東工大の授業で学んだことが少なくとも僕にはなかったので2年生のはじめの授業にて学ぶということに驚いた。心理学の話に興味があった自分としては少し残念ではあったが、授業自体は具体例や図説に富んでおり分かりやすかったこともありあまり退屈には感じなかった。

• Food Chemistry, Biology and Nutrition (F00D20003)

食品の消化について 1 時間の授業が行われた。人間における消化器官の紹介という非常に基本的なところから始まり、どのように人間が食べ物を消化するのか、酵素の役割などについて取り扱っていた。ほとんどの事柄は知っているような事柄ばかりであったことや図や説明が分かりやすかったので内容は非常に理解しやすかった。広い講義室で学生の数も多かったが、中には分からないことを授業内で直接質問している学生もおり、日本との違いを感じた。何かの授業の一部でこのような内容を紹介するのではなく、FOOD という専門の授業を行なっていることが驚きであった。

5-3. 研究室·大学施設見学

(1) Student Accommodation Tour (Student Village)

パークビルキャンパスから徒歩 5 分ほどの場所に、メルボルン大学の学生寮がある。玄関を入った一階には共有スペースがあり、様々な施設が用意されていた。コインランドリー、自転車置き場、共有キッチンなどの生活に必要な施設から、ビリヤード台、ジム、音楽スタジオなどの娯楽施設まで用意されていた。居住区域の各階には勉強スペースが用意されており、学生は静かな環境で勉学に励むことができるとのこと。また、寮生のボランティアが学生の相談役になるという制度があるようで、学生の精神的なサポートも充実している様子であった。



図 22 共有キッチンには冷蔵庫も設置されていた。



図 23 バーベキューをすることができる施設が中庭に設置されている。

(2) Thermodynamics Lab Tour

熱力学ラボツアーでは Yi Yang 准教授の研究室に訪問させて頂いた。研究室では 1900 年代後半にできた 2 気筒エンジン(後に修理・改良を行ったため、現在も使用可能であるとのこと)やスパークプラグがなく圧縮着火であるディーゼルエンジンの実物を見せて頂いた。また、この研究室では燃料としてバイオ燃料や天然ガスを用いる研究がされており、資源大国であるオーストラリアでは特に重要となる研究であると感じた。



図 24 Thermodynamics Lab 見学

さらに 3,4m 程のエンジンの出力などを測地する装置やエンジンの中の燃焼化学を計測する装置など、燃焼機関を研究する際に必要となる設備が整っており感激した。

(3) Hydraulics Lab Tour

流体力学の研究をしているラボを視察した。南極大陸の氷が海水に与える影響を研究しているとか、船が進むときの水面の様子を見てその波形が海水に及ぼす影響を、レイノルズ数を変化させながら研究しているなどと説明していた。後者の研究に使う実験装置は世界的に見てもかなり大型で、その分現実に近い結果を得ることができると言っていた。

(4) Nanostructured Interfaces and Materials Science Lab Tour

NIMS (Nanostructured Interfaces and Materials Science)を対象に研究しているラボの見学を行った。研究内容としては、ガンに対する特効薬として新しく nanomaterial の作成を行い、それを実際に細胞に導入しガンなどに対して効果が見られるかを確認するというものである。この研究室では現在30人以上の学生が在籍しており、実験室・居室・装置・試薬、そのどれをとっても東工大の研究室と比べ規模がかなり大きかった。学生が快適に研究できるような環境が、ほとんど揃っているということができるだろう。また日本から来ていた教授がいたり、他にも中国や韓国、アメリカ、ヨーロッパから来ている学生がいたりなど多様性が見受けられた。



図 25 NIMS Lab

(5) Teaching Lab Tour

15日(滞在9日目)、我々はこの施設を訪れた。この施設は東工大のCODAMA(ものつくり教育研究支援センター)と異なり、Course Work(授業のようなもの)でも利用されている。

施設は大きく分けて2棟から構成され、一方は電気電子系の実験環境が整備されており、ロボット製作や電気回路を用いた実験などが行えるようになっていた。いくつかの箇所にロッカーが設置されており、そこを借りることによって、材料や製作中の機械を自分たちで持ち出し・持ち込みすることなく、日をまたいで開発を続行できる環境が整えられていた。

もう一方の棟には流体工学で用いるプール、原油の蒸留設備、コンクリート混合設備、地 震発生設備などのほか、36 台の3D プリンターが所狭しと並べられている部屋や人間の動 きをトレースできる部屋、PC2 レベルの生物実験室などもそろっており、工学系から医学系 まで様々な研究を展開することが可能になっていた。

また、メルボルン大には F1 チームもあり、チーム専用の製作室があった。チームへの参加を希望する学生は多く、その中から選抜された優秀な学生 30 名が主体となって F1 参加用のレーシングカーを製作しているという。F1 で優れた成績を出すようなレーシングカーの製作に携わった学生は自動車メーカーからヘッドハンティングされることもあるそうだ。



図 26 Teaching Lab

5-4. Japanese Club Conversation Class について

(1)参加概要

プログラム5日目、私たちは日本語クラブの交流会に参加した。この交流会は、日本に興味のある学生が集まり、ポテコやキャラメルコーンなどの日本のお菓子を食べながら自由に歓談するという形で、毎週火曜の12-14時に行われているようだった。日本への留学を考えている人や、留学経験のある人、現在メルボルン大学に留学中の日本人学生など、およそ100人の学生が参加し、賑やかな空間だった。

派遣メンバーは各テーブルに1人ずつ座り、現地学生6、7人と交流した。現地学生に参加している理由を聞くと、日本のアニメやドラマ、音楽が好きだからと答えてくれた。コナンや鋼の錬金術師などのアニメが人気であることは想像できたが、最近のドラマやそれに出演している若手俳優、主題歌なども知っていたことに驚いた。英語が聞き取れないのでは

ないかという不安もあったが、日本語が堪能な学生も多かったため、英語と日本語を交えて 色々な話題について話し、有意義な時間を過ごすことができた。



図 27 日本語クラブ交流会の様子

(2) Class 参加の感想

お昼に定期的に開催されている日本語交流会に参加させて頂いた。そこでは 6、7 人の学生達と日本語 (時に英語で) 交流した。現地の学生たちの中にはメルボルン大学だけでなく高校生も参加していた。また、自身の専門分野の他に日本語を専攻している学生や複数の国での暮らしを経験しておりトライリンガルである学生など、多様なバックグラウンドを持つ学生達と"日本語で"交流できたことは日本人として大変嬉しく感じた。彼らの日本語は日本人と言っても差し支えないほどに流暢で、聞いてみると日本語の上級クラスで学んでいるようであった。

会話では特に、私の好きなハンバーグの話をするとなかなか通じないなど(日本人以外は ハンバーグと聞くとハンバーガーが連想されるそう)、他愛のない話のなかでも衣食住や文 化の違いを感じられたのが興味深かった。

この交流会でよく話していた学生とは後日カフェで会って、メルボルンでの暮らしやメルボルン大学での様子を詳しく教えて頂いた。この短期間で現地の友達を作ることは容易ではないが、今回のような交流会を通して人脈を作れるというのは非常に魅力的であると感じた。今度また私がオーストラリアを訪れるか、その子が日本に来てくれた時にまたお会いするのが楽しみである。

席に着くともう数人の学生がいた。東洋系の顔立ちをした人が多かった。彼らも、後から来た学生も、そこまで日本に興味がない様子で、新歓イベントになんとなく参加した感じの人が多かった。日本のことをガンガン聞いてくるわけでもなかったので、こちらとしても日本のことをベラベラしゃべってもしょうがない。というわけで、お互いの専攻を聞いたり、オーストラリアの学生生活のことを聞いたりと、どちらかというとオーストラリア側のことを多く話していた。

言葉の壁の話をすると、幾ばくか引っかかったり、理解できない部分があったが、大体は問題なく意思疎通ができたと思う。数人日本語を勉強している学生がいたので、彼らとは日本語で話したりもしたが、その場にいる全員が分かるわけではないので、日本語と英語のどちらを使うかというさじ加減が難しかった。最終的には英語で話していた。使用する言語が異なる人達のなかでコミュニケーションを取る際、そのような難しさがあることを再確認した。

交流会は二時間続いたが、私のテーブルには少し長すぎた。共通項のない人達との会話を 二時間持たせられるほど私のコミュニケーション能力は高くない。 最終的には各々絵をか いたり、お菓子を食べたりと好きなことをして、気が向いたらそれぞれの国の事情を話した りしていた。

終わった後振り返ってみると、お互い探り探りで会話をしていたら終わってしまったという印象だ。ただ、会話をしていて気づくことはいくつかあった。一つは、英語でのコミュニケーションが人並みにできるようになっているということ。二つ目は、コミュニケーションの難しさは言語が理由ではないということ。三つ目は、お互い人間だから最低限の意思疎通は言葉の壁があってもできるということである。当然その状態では満足してはいけないが、完璧でなくていいということだ。

以上がメルボルン大学日本語クラブとの交流会に関する所感である。

早速ではあるが、ここで1つ質問を問いかけよう。果たして、まともに会話も通じないような幼稚園児相手に楽しく会話を楽しむ大人などいるであろうか?

この質問に対する僕の答えは「そんな大人は存在し得ない」である。というのも会話は一 方的に話し続けるようなものではなくお互いに話し合い相互理解をするものだからである。 これを理解できずに一方的に話し続け相手をうんざりさせるような人間も世間には存在し ているがここではその会話弱者については割愛する。

先ほどの質問になぞらえるのであれば、英語という非母国言語を用いている僕はさながら幼稚園児であった。当然、相手を楽しませるような会話などできるはずもなく、メルボルン大学の学生と交流するという目的を達成することは到底不可能であった。終盤になると、僕と話すような人間はいなくなっており、己の未熟さを実感することができた。

この経験によって得た学びとしては、英語の未熟さを痛感したということだけでなく、他

者の好奇心を長続きさせることの難しさ・積極性の必要性が挙げられる。このどれもが有機的に結びついているため1つずつ解決するのは難しいが、その根底には英語力に対する不安が存在しており英語ができるようにならなくては前には進めない。挫折を味わうことで英語を勉強するモチベーションを高めることにつながったと考えると良い機会になったと思う。

私は日本語クラスの人は日本語が上手だと感じた。私の周りにいた人は、ほぼ全員日本語がペラペラだったので、日本語で会話した。自分も彼らくらい英語を喋れるようになりたいと思った。彼らは積極的に私に話しかけてくれた。彼らの個性を尊重する姿勢に感心した。

また、彼らが日本語クラスで使っている教科書も見せてもらった。それには、男言葉、 女言葉、関西弁など、私が普段意識しない内容も含まれていた。このことから、英語も型 にハマった、あるいは文法にこだわった喋り方を心がけて億劫になるよりかは、あまり意 識せずに喋る方がいいのかなと思った。

日本語をとても話せる人、そうでもない人と様々だった。出身はオーストラリアの人もいれば台湾や中国など、アジア近辺の国から来ている人も多かった。日本語クラブというだけあって、訪日経験豊富な人が少なからずいた。日本のアニメやゲーム、またはそれに準ずるコンテンツに興味のある人も多かったので色々なことを話せた。これは私の偏見かもしれないが、一般的な外国人は日本の地名は東京くらいしか知らないと思っていたので、日本語クラブの学生から、"Ibaraki"、"Aomori"などの地名が聴こえた時は大変感心した。日本というマイナー言語の国にここまで関心を持ってくれる他国の人がいることに気付かされたので、自分としても英語の習得と色々な国の知識を積むことに今まで以上に注力していくべきだと思った。

日本語クラブには日本にルーツを持つ人もいればそうでない人もいてバラエティーに富んだ学生が集まっていた。一人東工大に一年間留学していた学生がいてその人と東工大の話で盛り上がった。機械系の一つ上の先輩だったらしく楽しかった授業や学食の話ができた。会の後半は中国人留学生の人と英語と日本語を交えながらゆっくり話していた。日本のサブカルチャーに興味があると言っていたが中国国内だとアニメ好きは気持ち悪いといわれ風当たりが強いなんてことをこぼしていた。日本だとどうだと言われたため、自分たちの大学内ではそんなことはないよと伝えた。ところで中国人にとっても日本の漢字は難しいようだ。一番難しい漢字は何ですかと聞かれてぱっと思いついた「憂鬱」を挙げたと

ころ中国ではそれは昔の書き方のようで現在は「忧郁」と書くようだ。シンプルでうらやましい限りである。中国人とはある程度漢字を使った筆談もできると思われがちだがかなり異なる部分もあるのだと再認識できた。

全体としての印象は日本語クラブでは積極的に日本語で話そうとする人が多かったことだ。日本語クラブで集まり始めた途端いろんなところから日本語が聞こえてきた。東工大内で留学生と話すときに相手が日本語を話せる場合、それに甘えてしまうような自分の姿勢を改めなければ語学の上達は望めないのではないかと思い悔い改めることにした。

私は日本語であっても初対面の人と話すことが得意ではないため、英語で交流ができるだろうかと不安に思っていたが、参加している学生は日本語が堪能で、積極的に話しかけてくれたので、楽しい時間を過ごすことができた。私が英語を聞き取れないことがあっても、簡単に言い直してくれたり、日本語の単語を言ってくれたりと皆優しかった。好きな日本人俳優の話などで盛り上がることができ、NHKの朝ドラや、日本でも今放送しているドラマを知っている人がいて驚いた。どの学生も日本についてよく知っていて、日本が好きなのだと伝わってきた。中には、東工大に留学したいと言う学生もいて、私たちが日本と東工大についてプレゼンテーションをすることを話すと、実際に聞きにきてくれた。

交流した何人かとは連絡先を交換し、日本語クラブの時に撮影した写真を送るなど、何度 かやり取りをすることができた。せっかく知り合うことができたので、この縁を大切にした いと思った。

交流会の最初の方は上手く会話をすることができるか不安で緊張もしていたが、現地学生は皆優しく、私が英語を聞き取れないときでもゆっくりと言い直したり日本語で話したりなどしてくれたため次第に会話を楽しめるようになった。

日本の文化が好きな学生が多く、私も知っているアニメやマンガなどの共通の話題について盛り上がる場面がたびたびあった。日本に実際に行ったことがある学生も多く、その中でも、横浜を訪れたことがあるという中国人の学生が横浜中華街についての思い出を楽しそうに話してくれたのが印象的であった。私も横浜に住んでいるため、お互いが知っている場所について良いと思うところを共有できたのが嬉しかった。

参加していた現地の学生は出身国がばらばらだったが、英語と日本語という言語を通してお互いの考えていることを伝えられるということに改めて感動した。ただ、もっと私が英語を話したり聞き取ったりすることができればより話を膨らますことができたのではないかと思う。私が予想していたよりも日本語が上手な学生たちと話すことで、母国語以外の言語を学ぼうとする彼らの姿勢に刺激を受け、自然と自分ももっと英語の勉強を頑張ろうと思わされた。

また、今回の交流会で知り合えた現地の学生のうちの2人とは後日夜ご飯を食べに行くことができ、そこでも楽しい時間を過ごした。お互いの国の文化の違いについてなどの、 出身国が異なるからこそできる話をたくさんし、このような経験はこれまでしたことがなかった私にとってはその日の出来事はとても新鮮で、記憶に残る印象的な時間となった。

私は、メルボルン大学での日本語クラブの学生との交流でまず日本人とアメリカ人のハーフの方とベトナムからきたという人と話した。最初は、かなり流暢に英語を話していたので、ハーフの方を現地の人かと思ったが、彼女は高校まで、日本のインターナショナルスクールに通っていたと言っていて、日本語の方が楽だよ。と言っていた。周りに日本語を話せる人はあまりいなかったので英語での会話が主だった。オーストラリアについてどんなこと思うかなど、かなり積極的に質問をしてくれたので話し易かった。

つぎにオーストラリアと日本人のハーフの女性と話した。日本語で話しかけられビック リしたが、小学2年生まで日本にいたと聞き納得した。彼女は高校生の時に日本の高校に少 しいる機会があったそうで、「日本の高校生は英語できないよね。」と言っていたのでやはり 日本人の英語力は低いのだなと感じた。後半はハーフの方2人とオーストラリアに住んで いるというグレイスさんと日本語で話していた。グレイスさんは日本に何回か行ったこと はあると行っていたがビックリするくらい日本語がうまかった。

この会に参加して、英語は聞けているのだが、自分から話すのはかなり時間がかかると わかったので、またこのような機会があったときにスムーズに会話ができるよう、英語を 自分から発信する練習をしたいと感じた。

東工大からの参加者は別々のテーブルに割り振られた。私が初めに会話をした方はインドネシアから来た3年生(本大学は学士課程を3年間で終えるため、彼は最高学年である)だった。日本語とアジア学(日中韓の歴史や文化を学ぶ学問)を専攻しているそうで、日本語が非常にお上手であった。そのため、会話は日本語で行われた。彼曰く、シンガポールは受験戦争が過酷で、トップクラスの大学に入学するのは至難の業であり、よしんば入学を果たしたとしても、今度は"良い企業"に行くために学業の面で激烈な競争を繰り広げなければならないそうである。それに対し、オーストラリアは比較的成績を取りやすく、また、卒業後帰国してもシンガポールの企業は海外大卒の入社枠を持っているため、就職がたやすくなるという。話を聞く中で、「企業」「就職」といった言葉がしばしば出てきていた。このことから、日本でいう"文系"の学生は、メルボルン大学においても院に進むケースは少なく、学部卒就職思考があるのかもしれないと感じた。

次に会話をしたのはシンガポールから来た3年生(K さん、英語と中国語のネイティブで 日本語勉強中)とオーストラリア・パースから来た1年生(Y くん、同じく英語と中国語のネ イティブ、メルボルン大学の Semester 1 は 3 月から始まる) だった。K さんは日本語を専攻しており、とてもきれいな日本語を話される方であった。現在、日本語の文法について学士論文を作成している最中であるそうで、例えば「"頭がいい"と"賢い"はどう違うのか」といった、日本語の単語の意味や使い分けについての質問をいただいた。この質問に対して、ふりかえってみると、自分は適切な返答を返せていたとは言えず、意気消沈するとともに、英語以前に、地に足の着いた日本語を身につけることの重要性を認識した。

このテーブルで興味深かったこととしては、Y くんは日本語がほとんど使えないとのことだったので、K さんと私の間では日本語で会話し、Y くんと私の間では英語で会話し、K さんと Y くんの間では中国語で会話が行われたという点があげられる。非常に会話力の鍛えられる、インターナショナルな体験をすることができた。

なお、この2人とは滞在8日目(14日、木曜日)に夕食を共にすることになるがそれについては別項で触れる。

結局、多少の入れ替わりがありつつも、ほとんどの時間をこの2人との会話に費やしてしまったため、幅広い人と触れ合うことはできなかったが、その代わりにかけがえのない友をつくることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。

5-5. Come and try Netball

プレイヤーごとに役割が異なり動けるスペースも決まっているということもあり他の球技に比べると一見複雑な競技であったが、取り組むうちに慣れていき最終的には楽しむことができた。女性用競技と聞いていたのであまり激しくないのかと考えていたが、実際にはコート上を動き回る必要がありとてもハードな競技であった。



図 28 Netball の様子

5-6. Tokyo Tech Presentation について

(1) 日本について

About Japan

私は日本の諸データについて発表した。日本が47都道府県に分けられること、 首都は東京であるということなどの基本的なデータに始まり、日本の国旗の意味 について、国章、国鳥など日本人でもわからない人がいるようなものについても説 明した。日本とオーストラリアの違いをよくわかってもらうべく、人口は日本の方 が5倍多いが、国土はオーストラリアの方が20倍も大きいということを伝えた。

Japanese cultures

日本の文化について紹介するパートを担当した。歴史的建造物や伝統文化を説明する一方、現代の娯楽、スポーツなどにも触れてプレゼンをした。スライドは見やすいように一つのスライドに多くても2つまでの例を掲載するに留めた。

Japanese food

私のパートではただ単にまじめに話しているだけではつまらないと思い、5種類の食べ物から会場の皆さんに一つ選んでもらい一番人気だったものについて軽くお話するといった内容にした。これは東工大で行った事前学習にて、メルボルン大学からの留学生から、ただ説明するだけではなく interactive に説明していったほうが良いと言われ、それを取り入れてみた結果でもある。寿司、ラーメン、味噌汁、天ぷら、そばを写真付きで軽く紹介してからその中で一番おいしそうなものを選んで手を挙げてもらったのだが、ふたを開けてみるとラーメンが圧倒的人気だった。私の予想では寿司がトップになるだろうと思っていたためこれは完全に予想外だった。メルボルン市内の Swanston Street にある「ばんから」というお店のとんこつラーメンが美味しかったというエピソードを話したところ受けが良かった。

心残りは、このタイプのプレゼンに必要なアドリブができなかったことだ。ほとんどの 人がラーメンに手を挙げる中で一人そば押しの先生がいたため、そのとき何か気の利いた リアクションするべきだっただろうが緊張と語学力不足で叶わなかった。

Transportation of Japan

留学前にオーストラリアの学生に「日本の交通網はとても発達していて驚いた!」と言われたので、私は日本の電車、新幹線、飛行機について紹介した。具体的にはオーストラリアから日本に来る方法、成田空港と羽田空港の違い、都市圏の電車網、電車の混み具合や時間の正確さ、新幹線の種類や速度などを紹介した。

How Tokyo looks like

東京、および都市圏の人口、面積などのデータをヴィクトリア州のそれと比較し、東京にどれだけ人口が集中しているのかを紹介した。また、渋谷と丸ノ内の紹介もした。渋谷は、忠大ハチ公像、渋谷ヒカリエなどの有名なランドマークを簡単に紹介した。丸ノ内は、東京駅、皇居、および皇居周辺の地理の紹介をし、大都市の中心に大きな緑があるという東京の独特さをアピールした。

(2) 東工大について

Overview of Tokyo Tech

東工大の概要として、初めに知って頂きたい基本情報を簡単に説明した。東工大は英語で略して Tokyo Tech または Titech と呼ばれていること、6 つの学部と 20 の学科が設置されていることを述べたうえで、メルボルン大学と比べると圧倒的に少ないであろう東工大にいる学生の人数、メルボルン大学は学士課程が 3 年間であり、日本では通常 4 年間学士課程があることは特に伝えておきたかったため、東工大の教育制度についても述べた。またメルボルン大学に負けじと東工大にも美しいキャンパスがあり、130 年以上もの歴史を持つ大学であることを強調した。最近の東工大の研究者の活躍については、特に細野教授の IGZO、大隅教授のオートファジーに関する業績をお話して、東工大がどれだけ世界に貢献しているかをアピールした。

Distinctive classes

私の所属する第7類の授業から「最先端生命研究概論」・「バイオものつくり」の2つを選んで紹介した。「最先端生命研究概論」ではノーベル賞受賞者である大隅良典栄誉教授の授業を直に受けられることを紹介した。「バイオものつくり」の紹介では2018年度チームの研究をいくつか取り上げたが、来場してくださった方々は時々頷いていて、興味深そうにしていたのが印象的であった。

Our laboratory

東工大についてのパートの一部として自分の所属している研究室について軽く紹介をした。途中、考えていたセリフを忘れてしまいアドリブで話したが言いたいことは伝わっているようであったのが良かった。拙い英語で話しており現地の学生にしてみれば聞き取りにくかったり分かりづらいような内容であっただろうが真剣に聞いてくれて、冗談も笑って反応してくれるなど発表しやすい環境であったように思う。

<u>Circles and Clubs</u>

まず東工大には文化系・ものつくり系・運動系サークルと数多く学生組織が存在することを紹介し、次にその一例として、私が所属している写真研究部の活動について紹介し

た。年間予定と主な4つの活動について簡単に説明した。その中では写真をなるべく多く 用い、視覚的に活動の様子と楽しそうな雰囲気が伝わるように工夫した。サークルの集合 写真やクリスマス会の写真を映すと、笑ってくれた人もいた。最後に、東工大のホームページからその他のサークルについても情報が得られることを紹介した。

Recommended spots

大岡山キャンパスのおすすめの場所をいくつか紹介した。個人的には、大岡山キャンパスには季節の移り変わりを感じられる場所が多く存在し、それが魅力的であると感じていため、ウッドデッキやイチョウ並木などの四季を楽しめるような場所をピックアップした。また、普段私たちがどのような環境で学校生活を送っているかを知ってもらえるよう、東工大の建物の中でも特徴的な形をしている東工大付属図書館のことや、世界的にトップレベルの性能を誇るスパコン(TSUBAME)についても紹介した。緊張はしたが、現地の学生たちは皆和やかな表情で聞いてくれ、ところどころで反応もしてくれたため、話しやすかった。

メルボルン大学に実際訪れてみると想像以上に自然が豊かな環境で、設備もとても充実していると感じたが、私なりに大岡山キャンパスの良いところを伝えたかったため、今回の発表を聞いてくれた学生たちが東工大にも少しでも興味を持ってもらえたら嬉しいと思っている。

(3) その他

質問の時間では、東工大とメルボルン大学の留学プログラム期間に関する質問を頂き、東工大に興味を持って頂いているようで東工大生として嬉しかった。発表の後、ベスさんと吉川先生からプログラムについて補足して頂いた。その他にもオーストラリアに来て驚いたことは何かという質問を頂いた。私は現地の人々が雨でも全く傘をささないことについて話した。他にも美しい公園がたくさんあること、歴史的建造物と現代的な建造物が見事に融合した街並みなど伝えたいことは山ほどあったが、自身の英語力の乏しさから伝える時間がとれなかった。この経験も今後の糧にしていきたい。

5-7. 学生交流 Student Exchange

本項では個人的な学生交流について紹介する。

・メルボルン大学の学生2人との夕食会

事の発端は、日本語クラブでの会話の中で、"メルボルンでの食事"についての話題を取り上げたことにある。メルボルンの名物はあらかた食べた(と思い込んでいた)私は、彼ら2人(Kさん・Yくん)にメルボルンの御飯処で何かおすすめはないか、と聞いてみた。すると、彼らはおすすめのお店の場所をいくつか教えてくれたばかりか、時間があるのなら連れて行ってもよい、と言ってくれた。しかし、日本語クラブの直後には時間がとれそうになかったので、日を改めて、Dinner に行こうと提案したところ、受け入れていただけた。申し訳

ないことに、彼らはお店の予約まで行ってくれた。当日(滞在8日目・木曜日)の参加者は彼ら2人と私を含めた東工大生3名である。お店はLittle Bourke Street に面した中華料理屋"小街小籠館"であった。ここでは、小籠包をいただいた。皮を噛み破ると、中からじゅわっとスープが出てきて非常に美味であった。



図 29 おいしい小籠包

会話していて感じたのは現地大学生の向上心の高さ・言語能力取得への熱意である。K さんはすべての会話で日本語を使おうと努力していた(実際、ほぼすべての会話は日本語を用いて行われた)し、Y くんも3月という入学直後の時期から留学を見据えて動いていた(私たちから Tokyo Tech Presentation を紹介したとき、彼はすでにその存在を知っていた)。また、自分の英語表現力の低さ(思ったこと・感じたことを英語で表現することができない)も実感した。東工大では語学の分野をおろそかにして入学してきた学生が一定数存在し、実際私もその一人であるが、この友人たちと肩を並べていくためにもさらにいっそう日本語・英語の両面での能力強化が必要だと感じた。

日本語クラブ・夕食会を通じて、彼らとは友達になることができたと思う。渡航前にはこのような経験をできるとは予想だにしていなかったが、渡航することで初めて得られるものがあることを知った。

6. その他

6-1. メルボルンでの食事

このパートでは、参加者それぞれが滞在期間中に食べた食事の中で、「これは旨い!」 「これはどれそれの用途にちょうどいい」などと感じたものを3品ずつ紹介する。

第7類・学部1年

私が食べたオーストラリアの食事は、全体的に塩加減が控えめであり、食べやすかった。 ここでは滞在期間中の食事の中からいくつか紹介する。

(1) Beef Hamburger (Gullivers Wine Bar & Eatery)

メルボルン周辺は非常に多くのバーガー屋さんが存在した。私は滞在期間中に5つほど、ハンバーガーを食べたが、その中で特に美味しかったのはペンギンツアーの夕食で食べたものである。値段は\$15.50であり日本円に換算すると1000円を超えてくるものになるがパテ(アンガス牛を使用)の厚みが1.5 cm以上あり、ボリューミーな一品となっている。





図 30 ビーフハンバーガー

(2) Fish & Chips (Bearbrass)

イギリスの植民地であったという歴史もあり、オーストラリアでは街中にも何店舗か Fish & Chips のお店が存在する。私は South Gate にあるお店に行った。写真はその時のも



図 31 フィッシュアンドチップス

のである。値段は税込み\$22である。Fishはバター焼きを選択した。非常においしかった。

(3) Beef Cheeks (Grill Steak Seafood)

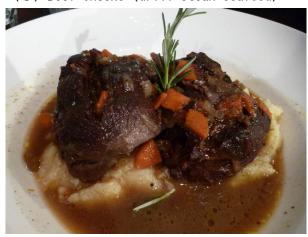


図 32 牛肉、おいしい

ジャガイモをすり潰しチーズを混ぜたようなものの上に牛の頬肉をのせた一品。ナイフとフォークを使って食べようと試みるも、肉が柔らかすぎて切れない。また、なかなかのボリュームなので、これ1皿でおなか一杯になる。値段は\$27と高いが、値段に見合ったおいしさだと思う。

第6類・学部1年

1位 ばんから醤油ラーメン



図 33 汁完です!

最終日の夜に食べたというのがかなり影響していると思われるが、やはり日本のラーメンが1番美味しく感じた。ホテルから近いところにあったので、日本食が恋しくなってしまった人にオススメ。日本人らしく、汁まで飲み干しました。

2位 ボロネーゼ



図 34 ボロネーゼ

これまた最終日に食べたことが大きく影響していそうだが、26 ドルした結構良いボロネーゼ。店内でなく、おしゃれな路地のテーブル席で食べたので、余計に美味しく感じた。最終日に現金があまり、少し高くなっても良いものが食べたいというときにオススメ。

3位 フィッシュ&チップス



サウスゲートの近くにあったかなりおしゃれなパブで食べたフィッシュ&チップス。正直最初はなめていたが、ビックリするくらい美味しかった。飲み物とセットで22ドルと少し高いが、美味しいフィッシュ&チップスを食べたいと思ったらオススメ。

図 35 フィッシュアンドチップス

システム制御系・2年

私はALDIというスーパーで買ったものの中から3つ紹介する。ここのスーパーは他のスーパーよりも商品が安く、おすすめだ。

(1) TIMTAM

甘くて美味しいオーストラリアを代表するスナック菓子。AUDで2.49ドルだった。お土産として大量購入している人も多かった。



図 36 Tim Tam

(2)カップ麺

1 ドル未満で買える。味はあまり美味しくないが朝食にはもってこいだ。



図 37 カップ麺

(3) クロワッサン

これも朝食にもってこいの商品!味は日本の物よりも濃い。1.49ドルで買える。



図 38 クロワッサン

機械系・2年

第一位 Kangaroo(\$31) by Grill Steak Seafood

カンガルーの肉が本格的に楽しめるお店として定評がある様子。程よい食感に仕立て上げる絶妙な薄さと味わい深いソースが極上の一品へと昇華させる。



図 39 カンガルー肉

第二位 Special Flied Rice(\$11.9) by Hana's Kitchen

あっさりした味付けが特徴。カロリー豊富な食事が多いメルボルン内では重宝すること と思う。日本食(お好み焼きなど)もメニューにある。



図 40 チャーハン

第三位 市販のポテトチップス($$2^5$)

日本で売られているものよりも厚みのある商品が多い。味付けもしっかりしているのでよく味わって食べることができる。



図 41 チップス

機械系・2年

一位: Lamb Shank



図 42 ラム

店員とおすすめメニューについて話していて、豚、牛、羊のどれが好みだと聞かたため、そもそも自分がラム肉を食べたことがないことを告げると、じゃあ今から試すべきだといわれ挑戦してみた。金曜日であり翌日は授業がないため、ラム肉によく合うと強くおすすめされた赤ワインもセットで注文。ワインのほうは少し値下げしてもらえた。ハーブなどの草とトマトとともに煮込まれていたからか、ラム肉にあるといわれている臭みはあまり感じられずナイフで簡単に切れるほど柔らかく煮込んでありおいしかった。日本ではあまり羊肉を食べる機会はないため貴重な経験だった。

二位: T-bone



図 43 肉

どうせならオーストラリアらしい料理を食べようと何人かで行った店。T-bone は400g と書かれており日本人の我々にとって一人で食べるには量が多いと感じられたため、二人でシェアして食べた。歯ごたえがあり肉の味がしっかりするステーキだった。

三位:大学内のハンバーガー



図 44 バーガー

白い袋に入った状態で渡されたのだがその大きさに驚いた。普段自分が食べるようなハンバーガーと比べて二倍ほど大きいからだ。中はトマトベースのソースと厚めのパテが入っていてとても美味しかったがチップスをつけて頼むと量がかなり多くなってしまうだろう。

材料系・2年

1位:フィリップ島のビーフハンバーガー

せっかくオーストラリアに来たので牛肉を食べたほうがいいと思って注文したが、想定以上に大きくて食べきれなかった。厚さもかなりあって、パテがジューシーでとても美味しかった。値段は\$15.5 と少し高いと感じたが、この大きさと美味しさを考えれば納得だった。



図 45 ビーフハンバーガー

2位: Hofbräuhaus のハム、ソーセージ

滞在したホテル目の前の中華街を進み、少し脇道に入ったところにあるドイツ料理店である。日本語クラブで知り合った現地学生に連れて行ってもらった。店員が伝統衣装を着ていて、生演奏もある、とても雰囲気のいい店だった。少し値段は高かったが、ハムもソーセージもジューシーで美味しかった。



図 46 ソーセージ

3位:8bit のハンバーガー

滞在したホテルの道を挟んで向かいのファストフード店である。店内はドット絵のデザインでかわいかった。 \$11.5 とそれほど高くはないが、フィリップ島のハンバーガーと比べると小さかった。しかしパテが厚くジューシーで、十分満足できた。ミルクシェイクやホットドッグも少し高いが美味しく、滞在中に2度この店を利用した。



図 47 ハンバーガー

材料系・2年

(個人的においしかった同率1位の食べ物です)

・ハンバーガーとミルクシェイク



図 48 バーガーセット

滞在していたホテルの近くにある「8bit」というお店のハンバーガーとミルクシェイクです。どちらもボリュームがありました。

・ステーキ



図 49 ステーキ

派遣メンバーの何人かと一緒に食べに行ったときに注文したステーキです。分厚くて、柔らかかったです。

・ドイツ料理のソーセージ



図 50 ソーセージ

チャイナタウンの方面にあるドイツ料理屋さんのソーセージです。ジューシーでした。

機械系・3年

1位 Tokui Sushi の巻き寿司

現地の友達に「ここの寿司は美味しくて安い」と紹介してもらい訪れた。具はサーモン、たまご、エビ、ツナマヨなどがあり、すべての具にアボカドが添えられている(左下図)。オーストラリアではサーモンが一番人気であった。1本2.2ドルほど(支払いはキャッシュ払いのみなので注意)で右下の写真に示すような巻き寿司を頂くことができる。味と食感ともに日本の巻き寿司レベルで大変美味しく頂けた。遅くに行くと売れ切れている場合があるので立ち寄る際はお早めに。



図 52 ツナマヨとアボカドの巻き寿司



図 51 美味しく頂いた巻き寿司

2位 Brunetti のケーキとカフェオレ

オーストラリアに来たら一度はカフェに立ち寄って頂きたい。どのカフェも美味しく、至福のひとときを過ごすことができるだろう。ここで紹介するのは、大学から少し歩いたところにあるカフェ Brunetti。何種類ものケーキと美味しいコーヒーやモカを頂けるのでおススメのカフェである。



図 54 濃厚なチョコレートケーキ



図 53 甘くて美味しいカフェオレ

3位 pie face のミートパイ

オーストラリアの国民食として有名なミートパイ。pie face はミートパイとカフェで有名なオーストラリア発祥のチェーン店である。世界チェーンで日本にもあるが、一度本場のオーストラリアで頂くのも一興である。味は文句なしの美味である。



図 55 pie face のミートパイ

融合理工学系・3年

現地で頂いた食べ物を3点ほど紹介する。

・Union House にあったお店で買った、マフィンとフラペチーノ

マフィンはアップルシナモン味で、可もなく不可もなくという味だった。メルボルン市内のコンビニでもスーパーでもマフィンをよく見かけたので、マフィン文化は日本より発達しているのだろう。フラペチーノは抹茶味とされていたが、日本の抹茶フラペチーノを想像していたため、少し残念な気持ちになった。抹茶の味がだいぶ薄く、抹茶風味のフラペチーノと言った方が適切だろう味だった。



図 56 マフィンと抹茶フラペチーノ

・Betty's Burger のチキンクリスプ

市内にあるハンバーガーチェーンは日本では見ないものも多くあった。そのうちの一つに立ち寄った。21 時まで営業しているため、メルボルン市内では遅くまで営業している店に分類されるだろう。アルコールの販売もしており、ハンバーガーのお供に嬉しい。遅い時間帯だったので、家族連れは皆無だったが、カップルや、友人連れの若者が多かった印象だ。



図 57 チキンクリスプ。ボリューム満点。

どのお店のハンバーガーも、大きさが日本のそれよりだいぶ大きかった。少し値は張るが、 はらぺこ紳士、淑女の諸君は是非トライしていただきたい。

・りんご

コンビニでリンゴが売っている。日本のリンゴより二回りほど小さい小ぶりなリンゴが 大体\$1 で売られていた。クイーンヴィクトリアマーケットでは、同じくらいのサイズのリ ンゴが\$4/kgほどで売られており、信じられないくらいの安さであった。街を歩いていると、 リンゴをかじりながら歩いている人をよく見かけた。安さ、サイズ感が歩きながら食べるの にぴったりなのであろう。また、市内にはゴミ箱が多く設置されているため、食べ終わった らすぐに捨てることができて便利だ。



図 58 リンゴとコーヒー。あわせて\$2。

生命理工学系・3年

オーストラリアの食 best3

1. メルボルン大学近辺のカフェの朝食



図 59 カフェ

2. メルボルン市内で食べた T ボーンステーキ



図 60 肉

3. フィリップ島で食べたチキン



図 61 鶏肉

6-2. メルボルン: 街の様子

メルボルン市内には複数の大きな公園が存在する。そこでは、木陰で本を読んだり、昼寝をしている人など都市部とは思えないほど落ち着いてのんびりした雰囲気でリラックスすることができる。広大なFlagstaff Gardens、人が少なく並木道のベンチでゆっくりくつろげる Treasury Gardens、最大規模のFitzroy Gardens は是非とも一度立ち寄っておきたい公園である。



図 63 Flagstaff Gardens からの景色



図 62 Treasury Gardens の並木道

3月9日から11日の3日間、ヤラ川周辺でムーンバフェスティバルが開催されていた。 遊園地のアトラクションや多くの屋台、無料のコンサートなどが開催されていた。メルボル ン市内は夜遅くまで若者からご老人まで年齢関係なく賑わっている様子で、その場にいる だけでこちらも楽しくなるような雰囲気であった。





図 64 ムーンバフェスティバルの様子;無料コンサート(左図), 立ち並ぶ屋台(右図)

メルボルンは3月15日から17日の3日間かけて行われるF1の大会、オーストラリアGPの開催地としても有名である。大会が近づくにつれてメルボルン市内では、F1のトークショーやレースカーの展示、グッズ販売などF1色に染まり、熱気に溢れていた。





図 66 展示されていた F1 レースカー

図 65 大画面に映し出された F1 の広告

メルボルンに住んでいる人が多文化的なのはもちろんなのだが、建物の多文化さに驚かされた。近代的なデザインの建物やかなり古い歴史を感じるような教会など、様々な建物が共存していた。メルボルンでは、景観を守るという固定観念には捕らわれず、多様性を重んじた精神が街の様子にも出ていると感じた。

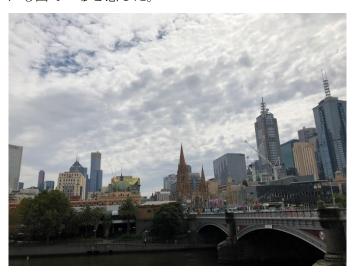


図 67 メルボルン市内の様子

街の人たちは、何かを背負ったり、人の目を気にしたりして生きている様子ではなく、の びのびとフランクに生活している印象を受けた。例えば、警官や警備員が巡回中にジュース を飲みながらおしゃべりをしていたり、ストリートパフォーマンスを楽しそうにやってい たり、良い街、良い雰囲気だと感じる場面が多かった。

街には、トラムと呼ばれる路面電車のようなものが走っており、移動はこれがメインにな

る。メルボルンのトラムにはフリートラムゾーンと呼ばれる、その範囲内であれば無料でトラムに乗ることができるゾーンがある。







図 68 フリートラムゾーン

フリーゾーン外に行く際にはトラムに myki と呼ばれるパスモのようなものをタッチしてから乗る。これをタッチし忘れてフリーゾーン外の停留所に降りると罰金が課せられるので気をつけましょう。メルボルンの人は平気でタッチしないで乗り降りしていたが、私たちのような人間はやらないほうが良いだろう。

トラムが走っていることもあるだろうがメルボルン市内には、様々な標識や特徴的な道路があった。

まず紹介したいのは、信号だ。メルボルン市内の信号が青の時間が極端に短く、日本のように青が点滅するのではなく、赤になって点滅するのでかなりややこしい。また、青の時間が短くない代わりに点滅する時間が日本に比べかなり長く無理だと思っていても意外といけてしまう。そして日本でも多少はいるが、メルボルンでは、信号無視という認識は薄いらしく、赤でも渡っている人が多かった。



図 70 メルボルン市内の信号機

次は標識についてだ。







図 71 街中の標識

上の写真の左のものは、『自転車はトラムの後ろに止まりましょう。』というトラムがなければないような標識だ。真ん中のものは『赤信号のカメラがあるよ。』という注意喚起のものだ。オーストラリアは交通ルールが厳しいらしく、少しの速度違反でも捕まってしまうらしい。それを表しているような標識だろう。右のものは、フェアウェイと言って、トラムが優先である道路だということを示す。日本ではこのような道路標識を見たことがなかったため、珍しく感じた。



図 72 自転車専用道路

これは自転車専用道路だ。日本にもあるがメルボルンにあったものは車道と一緒ではなく、車道の中に新たに一つスペースを用意してあるので安全だろう。

ここでは詳しくは紹介しないが、他の特徴的な建物や場所について簡単に紹介する。



図 73 フリンダース・ストリート駅

街の中心的な駅。レトロな趣のある建物で、夜になるとライトアップされていて、さらに 良い雰囲気。写真映えする。ホテルから5分しないくらいのところにある。



図 74 ヴィクトリア州立図書館

市内にある州立の図書館。かなり大きく、利用者や観光で訪れている人の両方がたくさんいた。この写真は図書館の奥にある、資料館のような場所からの景色。



図 75 ビクトリアマーケット

ビクトリアマーケットはフリートラムの範囲内にある、市場のようなもの。市場といっ

ても生鮮食品だけでなく、雑貨もたくさん売っておりお土産を買うのにも良い。



図 76 ロッドレーバーアリーナ

全豪オープンの会場。ホテルから歩いていける距離にある。テニスをしている人や興味がある人は訪れても良いと思う。





図 77 ユーレカスカイデッキ

ヤラ川の近くにある 88 階建ての高層ビル。展望台からは街を一望できる。ガラス張りのスペースや網で囲まれた風を感じることができるスペースなどバラエティーに富んだ展望台である。夜景はすごく綺麗だったので訪れて実際に見て欲しい。

6-3. 休日の過ごし方(観光紹介)

(1) ペンギンツアー

ペンギンツアーとあるがペンギンを見るのは最後の最後でその前に動物園に行き、コアラやカンガルーなど、オーストラリア特有の動物を観察した。見た動物はコアラ、カンガルー、アルパカ、孔雀、エミューなどだ。その日は日が照っており高温だったため、カンガルーはかなりしんどそうで横になって無防備にぐったりとしている様子が見られた。



図 78 あまりの暑さにぐってりするカンガルー

動物園をあとにするとガイドの方が見晴らしの良いところに連れて行ってくれた。海沿いの場所で所々にペンギンの羽毛が散らばっており、その付近に巣穴がたくさんあるようだった。道を下っているとたまたまペンギンの巣穴にペンギンがいるのを確認できた(下の写真)。



図 79 巣穴にいるリトルペンギン 遠くから望遠レンズでのぞかせてもらった

最後にペンギンパレードという、日没後にペンギンが一斉に海から巣穴へと帰る様子を見に行った。その日は干潮であったため我々からするとペンギンを観測しやすかったわけだが当のペンギンからすると歩く距離が増えて大変なようだ。 ペンギンたちが7~8匹ほどまとまってゆっくり歩いていくのだが、その様子はとても可愛らしかった。ものすごい数の観光客がいて、中には撮影禁止なのにフラッシュ付きで撮影しているマナーの悪い観光客もいたのが残念だった。ガイドさん曰くカメラのストロボはリトルペンギンにとってとても有害であるため今後もこのペンギンパレードを観測できるかは世界中の観光客たちのマナーにかかっていると感じた。

(2) ワイナリーツアー

メルボルン市内から北東に車を走らせて1時間、ワイン造りが盛んな Yarra Valley がある。車に揺られて点在するワイナリーをめぐった。見渡す限り広がる広大な土地の景色はさぞ綺麗だろうと思われるかもしれないが、当日は山火事の影響で一帯が煙っていた。どうやら私が考える山火事とは規模が違うようだ。ガイドさん曰く、来年のワインはスモーキーになってしまうとのこと。

巡ったワイナリーは Coldstream Hill Winery、Dominique Portet、Domain Chandon の三つ。各ワイナリーでテイスティングをした。正直なところ、筆者はワインがわからない。したがって、"チェリーのような風味が~"のようなレポートはできない。が、美味しいことは確かだ。



図 80 Coldstream Hill Winery の玄関口

テイスティングで飲むワインの量は少ないが、それでも何度もしていると酔ってくる。当然お財布の紐も緩くなってくる。結局セールストークにそそのかされて2本ほど購入した。 悔いはない。



図 82 Dominique Portet で昼食を取る筆者ら



図 81 テイスティングは各ワイナリーで6種類ずつほど

三つのワイナリーを巡った後、Yarra Valley Chocolaterie & Ice Creamery に。チョコレート工場が併設されており、ショップの中からその様子を見ることができた。イースターが近い時期だったので、卵の形をしたチョコレートがおススメされていた。店内に入るとチョコチップの試食ができた。大皿一杯に盛られたチョコチップをスプーンですくって試食するスタイルである。採算取れているのだろうかと心配になってしまうほど豪快に盛られたチョコチップを、ひとすくい頂いた。



図 83 名物のアイスクリーム。物量を感じた。

(3) ロッドレーバーアリーナ



図 84 ロッドレーバーアリーナ

ここは 2019 年 1 月に全豪オープンが行われた会場のうちの一つであり、大坂なおみが決勝で勝ったのはこの会場である。会場はホテルから 20 分くらい歩いた所にあった。市内と違い、緑が多く人が少ない道を歩いた。テニス界で優秀な成績を残した人の像が多くあった。中に入ることは出来なかった。

(4)メルボルンの王立植物園

ロッドレーバーアリーナを超えて10分くらい歩くと、メルボルンの王立植物園がある。とても大きい公園のような場所で緑が生い茂っていた。特に感動するような場所はないが、オーストラリアの広大なる自然を感じることが出来た。



図 85 王立植物園

(5) グレートオーシャンロード

オーストラリアに到着してからツアーに申し込んで、最終日に行った。朝 7:40 に近くの ホテルに集合し、19:40 頃に帰ってきた。ツアー代金は 155 ドル。

3月の時期はあまり混んでなく、渋滞にも遭わずに行くことが出来た。グレートオーシャンロードは日差しが強く、サングラスと日焼け止めは必須だと言える。ドライアイかつ目が弱い私は、サングラスをしていても目を開けられないことがあった。



図 86 グレートオーシャンロード

(6) セント・キルダ・ビーチ

トラム 96 番に乗って終点まで行くとみられるビーチ。本プログラム時点では季節は夏の終わりくらいだったので浜辺で日光浴をしている人も見かけた。横に長いビーチであり、犬の散歩をしている人、サイクリングをしている人などリラックスする手段は人それぞれであった。



図 87 セント・キルダ・ビーチ

シティから一番近くにあるビーチがここである。海と砂浜が長く続き、散歩する人やジョギングする人、近くのカフェで海を眺めながらのんびりする人など、思い思いにこのビーチで時間を過ごしている姿が見られた。私が訪れたときは直前まで雨が降っていたため、まだ雲が残っていたが、それでもわずかに表れた青空と青い海と砂浜が一緒になった景色はとてもきれいだった。砂浜にはビーチグラスや貝殻などが落ちていたり、鳥の足跡らしきものもあちこちに残っていたりし、鳥たちにとっても散歩道となっているのかもしれないと思った。また、時間の都合で夕方まではいられなかったが、ここから眺める夕日も美しいだろうなとも感じた。



図 89 セント・キルダ・ビーチ



図 88 砂浜に残る足跡

(7) ブライトン・ビーチ

フリンダースストリートステーションからサンドリンハムラインに乗り 20 分ほどで、かわいい小屋がビーチに立ち並ぶ景色が印象的なブライトン・ビーチの最寄り駅にたどり着くことができる。目的の駅にたどり着く途中で車窓から多くのウォールアートを見ることができる。最寄りのブライトン・ビーチ駅についてからは、10 分ほど浜辺を北に向かって歩くことで右下図のような小屋が立ち並ぶ場所にたどり着くことができる。



図 91 ブライトン・ビーチ駅の改札



図 91 ブライトン・ビーチに並ぶ小屋

現地では、観光に来た人々が自身のお気に入りの小屋を見つけては写真を撮っていた。私の個人的なお気に入りは葛飾北斎の絵が描かれた小屋である。この地を訪れた際には自身のお気に入りの小屋を見つけて、友達などにシェアしてみると面白いだろう。



図 92 葛飾北斎の神奈川沖浪裏が描かれた小屋

(8) カフェ

メルボルンはオーストラリアのカフェ発祥の地と言われるだけあり、街中には多くのカフェが集まっていた。私はその中でも、シティにある「リトルカップケーキ」というカフェに入った。そこでは10種類以上のカップケーキが売られており、コーヒーなどの飲み物とともに店内で食べることができる。飲み物の選択肢も多く、豊富な種類のコーヒーやホットチョコレートなど、カップケーキのお供に何を選ぼうか迷ってしまうかもしれない。お店は外観も内装もかわいらしく、店員さんは私のつたない英語での注文でも親切に受け答えをしてくれた。甘くておいしいカップケーキとコーヒーを味わいながら落ち着いた時間を過ごすことができる場所だと思う。

このお店の周りにもカフェは何軒も並んでおり、午前中に訪れたときには既に多くの人がいろいろなお店でカフェを楽しんでいた。



図 94 「リトルカップケーキ」の外観



図 94 カップケーキとフラットホワ

7

(9) セント・パトリック大聖堂

遠くからでも目立つ立派で巨大なカトリック教会である。私が訪れたときはちょうど礼拝が始まる前だったようで、牧師の方が準備をしていたり、礼拝をしに来た現地の方がお祈りをしたりしていた。外が道路に面していることで聞こえてくる車や人や自転車が行き来しているような生活音が、大聖堂内に入ると一気に消え、空気が違うと感じたのを覚えている。大聖堂内は厳かで静かな雰囲気であり、窓から差し込んでくる日の光がオレンジ色に中を照らしていたのが印象的だった。また、後方の壁には大きなステンドグラスがあり、その美しさには圧倒された。



図 96 大聖堂の外観



図 97 大聖堂内の様子



図 95 ステンドグラス

(10) ルナパーク

中心部のシティからトラムで 20 分ほど南に行ったところに、セントキルダという町があり、そのシンボルになっている小さな遊園地である。入園のみは \$ 5、乗り放題だと \$ 50 だった。インパクトの強いエントランス(下図)をくぐると、園内はレトロでカラフルだったので、写真を撮ってまわり、入園だけでも十分楽しめた。休日だったためか、多くの家族連れや学生で賑わっていた。子ども向けの乗り物が多く、ジェットコースターもそこまでスピードが出ていなかったが、回転しながら水平から垂直になるという変わった乗り物はスリルがありそうで、印象的であった。



図 99 ルナパークのエントランス



図 98 ルナパーク園内の様子

(11) F 1 オーストラリアン・グランプリ

シティの少し南、アルバート・パークで開催された。滞在が偶然 F1 の開催期間と重なっていて、せっかくの機会だと思ったので会場に行ってみた。私はスポーツカーにも車にも詳しくないが、会場はお祭りのようになっていて十分楽しめた。トラムも F1 のために臨時で路線が変わったり、増えたりしていて、街全体で盛り上げているという雰囲気であった。私はピクサーの映画「カーズ」が大好きなので、その世界だと思うとワクワクした。アナウンスが英語の上に聞き取りづらく、内容はわからなかったが、レースの始まりや人気選手などは観客の雰囲気でわかった。F1 の空気、そのスピードを間近で体感できたことは貴重な経験だった。



図 100 会場の様子





図 102 F 1 カー

図 101 スーパーカー

(12) アーケード

シティの中にはアーケードがいくつかあり、それを巡るのも楽しかった。特にロイヤルアーケードとブロックアーケードが印象的であった。英国風の美しい通りで、まるでテーマパークのようだったが、現地の人は普通に買い物をしていて不思議な気持ちがした。日本にはこのような通りはあまりないので、海外に来た、という実感が湧いた。入っている店は少々高級で、学生には縁がないような気もしたが、見て歩くだけで十分楽しかった。



図 103 アーケードの様子

(13) スーパー

シティには大きなスーパーが2つあり、1つは赤がテーマカラーのコールス、もう1つは 緑のウールワースである。メトロという小さなスーパーもあるが、これはウールワースの系 列である。どちらも品揃えが良く、見ているだけで楽しかった。やはり牛乳やスナック菓子、 パンなどは量が多いが安いので、朝ごはんなどを調達する場合は、滞在の最初の方にまとめ て買うのが良いと思った。またチョコなどのお菓子も格段に安いので、お土産を買うのにも おすすめである。私の体感ではお菓子はコールスの方が安かった。

(14) カジノ

日本とオーストラリア、両国の違いの卑近な例としてはギャンブルが挙げられる。オーストラリアではギャンブルが合法である。街中にはスロットやポーキーが遊べる店舗が多くあり、また、滞在していたホテルのロビーにもスロットが置いてあるスペースがあった。メルボルン大学の学生日く、オーストラリア人はギャンブル好きな人が多いとのこと。ヤラ川の南側を少し歩くと、クラウンカジノがある。セキュリティを通るとスロットマシンの大群が目に入った。広いフロアの端から端までぎっしりとルーレット、ブラックジャックなどのテーブルが並んでおり、多くの人が勝負を楽しんでいた。テーブルのレートはミニマムが



図 104 カジノにはホテルが併設されている。



図 105 あっという間に\$50 を消した 帰り道、振り返ると嘲笑うかのように 光るクラウンの看板があった。

\$2.5 (日本円で 200 円弱くらい)。あまりなじみのないスタッドなどのゲームのテーブルにも $2\sim5$ 人ほど集まって、賑わっていた印象だ。\$50 ドルを持ってルーレットテーブルに行った筆者は、一度目のベットで、\$20 ほど勝ち\$70 ほどになったが、最終的には手元にあったチップは全て無くなってしまった。

7. 所感

第7類・学部1年

私は、今回の短期海外派遣留学に参加する以前には、一度も日本から出たことがなかった。 今回この短期留学に応募した背景には、「研究者になる」という将来の夢を実現するために も早期に海外経験を積む必要があると感じたことがあげられる。

私にとって、今回の海外派遣は準備段階から新しいことの連続であった。パスポートの取得やETAの申請などの手続きを、実践的に学んだ。片道9時間以上も飛行機に乗り続けたのは初めての経験だった。

実際に現地に赴くと、日本とオーストラリアの教育・研究環境に大きな違いがあることを 実感した。メルボルン大では、授業後に十数人もの学生が教官を取り囲み質問している光景 を何度も見た。キャンパスは大都市の近郊にあるにも関わらず、日本国内の大学に比べて広 大な敷地を保有していた。講義室や研究室は広々としており、キャンパス内のところどころ に庭園が設けられ、総じてゆったりとした時間が流れていた。また、大学の施設内に企業の 広告が流れているなど、産学の連携が発達しており、企業から資金提供を受けて高度な研究 環境を整備しているようであった。Teaching Labでは研修を受ければ学部生であっても東 工大ものつくりセンターに無いような大型の工作機械や各種設備を利用できるという。

また、大学外に目を向けてみると、確かにメルボルンは世界で1番住みやすい都市のひと つとされるに恥じないほど快適な都市であった。中心部のトラムは本数が多いうえに運賃 はタダである。キャッシュレス決済が発達しており、マーケットに出店しているような小規 模店でもクレジットカードで決済が可能だった。

今回の滞在を通じて日本(あるいは日本人)との違いを目の当たりにし、将来国際的に研究を行うために、自分に必要なものというのがおぼろげながらつかめてきたように思える。

1つ目は、日々の生活に対する意欲的な姿勢だ。学生の生活の中で重要な地位を占めるのは学業である。その際、メルボルン大の学生のように、少しでも疑問を感じたなら人にきくことは重要であろう。私はいつも自分で調べようとしてしまうが、これでは時間がかかってしまう。調査にかける労力と時間を天秤にかけて迷わず選択できる見識を身につけたい。

2つ目は、メルボルンという都市に流れる、ゆったりとした空気感だ。移民を受け入れてきた歴史から醸成される、この形容しがたい空気感が真っ向からの議論を行える土壌をつくり、その議論の場から新たな発想が生みだされるのであろう。この空気感を自分の周りに再現できるようになりたい。

3つ目は、語学能力の前提となる思考力だ。実際に渡航して実感したが、英語能力の低さはコミュニケーションを疎外する要因にはならない。考えを完璧に英語に落とし込んで伝えられなければ、コミュニケーションは不可能だというのは間違っている。私の操る英語はひどいものであるが、相手は聞こうとしてくれる。思考経路がしっかりしている話を展開すれば、多少つたない英語だったとしても相手にこちらの意図を伝えることはできるのだ。よ

しんば伝わらなかったとしても、「コミュニケーションするに値する」と判断され、少なく とも相手は聞く努力をしてくれる。

現地におけるこれらの気づきを今後の生活に活かしていきたいし、自分の姿勢をどの程 度改善することができたのか測る場として、これからも積極的に留学を経験していきたい と思う。

第6類・学部1年

私は、今回、自分の英語力が海外でどの程度通じるものなのかを知りたい、また英語圏に行ったことがないからという理由でこの超短期派遣に応募した。もちろん10日間という短い間で英語力が向上することはあまり見込めないがこの10日間で、目新しいものに触れ、大学生になってから低下しつつある、自分の学びに対するモチベーションの向上が見込めるのではないかと期待していた。結果としては、モチベーションの向上につながったと感じる。というのも、メルボルン大学の学生を見ていると授業が終わっても教授を廊下で何分も質問攻めにしたり、授業中に教授に何か質問はありますか、と聞かれずとも自分から積極的に手をあげ、質問したり、学生の学びに対する貪欲さを感じる場面がすごく多かった。日本語クラブで現地の人の日本語のうまさに驚かされたが、それもその学びに対する貪欲さゆえになのだとわかった。日本人はよくも悪くも慎ましく、自分が自信のあることでないとなかなか発言をすることはない。しかし、メルボルン大学の学生は、これは日本語でどう言うのかや、ちょっとした疑問でもすぐに周りの人に聞き、周りの人も良く質問してくれたねという雰囲気で快く答えてくれる。この環境の違いが日本人の言語力に深く関わっていると感じた。なので、私はこれから先の大学生活では、積極的に貪欲に知識を取り入れて行き、教授を困らせるくらいの気概を持ちたいと感じた。

メルボルンという街に10日間滞在してみて、感じたのは、非常に過ごしやすい街であるということだ。非常に多国籍なことも関係しているだろうが、とても寛容で友好的であった。様々な国の料理があり、日本でも流行っているタピオカがオーストラリアでも流行っているのは意外だった。ほかにもかなり日本料理の店が多く、寿司屋の多さには驚かされた。またメルボルンにいた時に自分の英語力のなさを感じる場面が多くあった。というのも自分が何を言いたいのかを整理できている時は良いのだが、不意な会話の際に返答がうまくできずにせっかくの会話の機会を無駄にしてしまっていた。なので、これからは、日本語で考えてから英語でいうのではなく、英語のまま考えられるようになりたいと感じた。

このように恵まれた環境の中過ごした10日間であった。この経験を無駄にせぬよう、これからの学生生活を過ごして行きたいと思う。

システム制御系・2年

私は英語力に自信がなかったので初心者向けとなっていたオーストラリア超短期留学を志望した。初心者向けとなっていたので、メンバーも似たような人が来ると思っていた。しかし、現実は甘くなかった。仲間の英語力の高さ、そして頭の良さと経験の豊富さに驚いた。企業で研究をやらしてもらった子も入れば、類の主席もいるし、プログラムお化けもいた。そんな頭がいい人達の中で過ごしたことは、自分の成長に繋がると感じた。

食の面では、基本的に日本より美味しいものはなかった。朝ごはんにはよくカップ麺を食べた。カップ麺は1ドルくらいで全て買えるが、味はほぼ全て同じで飽きるのもばかりだった。また、普通に過ごすと、ハンバーガー、ポテト、ホットドッグ等、炭水化物とタンパク質ばかり摂取することになってしまうので、野菜をとるのを意識した。オーストラリアは物価が高く、そのような国では安くて美味しいものを見つける能力が大切だと感じた。

メルボルン大学に関しては、まず施設の立派さに驚いた。図書館はコンピュータの数が圧倒的に東工大より多く、また、食べ物も匂いがなければ持ち込みができるという点に感心したし、ソファーのように座れる場所が多く、羨ましく思った。授業時間は基本的に50分で短く、集中したまま終えることが出来た。授業に参加している学生のパソコン使用率が東工大よりも高く、授業中はタイピングの音が鳴り響いていた。トイレは手を洗うスペースとトイレスペースが分かれていて清潔感があった。

授業に関しては、そこで学んだ事項がどのように実世界で使われているかを説明していることが多く、勉強モチベーションの構造に繋がった。教授の問いかけに学生の誰かが確実に答えたり、授業を遮って自分から質問したりする点が東工大との違いだと感じた。

この留学を通して、海外の授業の雰囲気や生活の様子が分かった。この経験を活かして、 次はもう少し長めの留学にチャレンジし、海外就職も視野に生きていこうと思った。

機械系・学部2年

これは結果として言えることだが、メルボルン大学はかなり国際性の強い大学であった ため、日本の大学に不足しがちな要素である国際性を存分に知ることができた。学生数の規 模も、施設の充実度も東工大とは比較にならないくらいだったので対照的な学びを得られ た。

このプログラム時点では、私の英語力は英語圏でまともに授業を受けることがとてもかなわないような程度だったので、このプログラムで講義の内容を必死に理解しようと臨むつもりは皆目なかった。それでも、数日間メルボルン大学に通うことで多少なりとも留学に関するイメージを定着させることができたので、大いに意義のある生活をすることができたと思っている。講義の雰囲気、学生の過ごし方、キャンパスの様子、その他施設の使い方など、様々な国から学生が集まる大学ならではの環境を知ることができたことが、これからの留学の参考になった。また、一緒にプログラムに参加した仲間も高い意識を持っていたのでそれにも刺激された。今後より一層勉学に精進する動機づくりとして今回のプログラム

はうってつけだった。

いつもと違う環境に置かれると、なんとかしていち早く適応しようと頑張ることになるため、違う言語で話し、違う大学に通い、違う生活を送ることが心身を共に成長させることになることは間違いないはずだ。もちろん初めは萎縮してしまっても仕方ないと思う。しかし実際に参加して分かったことであるが、一日目にホテルに戻ってから二日目にまた受けたときには午後くらいにはもうすっかり慣れている頃合いになり、そうなってから受ける講義は絶対に手応えを感じるものになる。ここで躍起になったり、苦労を味わったりすることが今後の目標の材料になり、それに向かって真剣に取り組める自分を形成できさえすれば、プログラム参加中にあまりコミュニケーションが取れなかったとしても全く気にすることはないだろう。

機械系•学部2年

まずはメルボルン大学とそこの学生について。やはり現地の大学生は我々と比べ意識が高いように感じた。最初の授業で隣のおそらく一年生と思われる中国人留学生が話しかけてきたのだが、まだ一学期始まって一週間しかたってないのに MATLAB 使っていると言っていて驚かされた。時々行われる学科のクラブの紹介ではワークショップや実際にプロジェクトを行うなど、授業のみならず課外活動でも積極的に勉強していることがうかがえた。見習わなくてはならない。また、現地の留学生は英語ネイティブではなくとも英語がものすごく堪能であった。先ほどの中国人留学生も私との軽い会話の中で出てきた TeX というワードを調べるとき中国語版ではなく英語版の Wikipedia を使っていた。一方、話題を振った来年度3年生である私は英語で TeX をうまく説明できずにあたふたしてしまい、自分の語学力のなさを痛感した。授業進度はかなりゆっくりであるようで、我々が学部2年でやるような内容を修士の授業でやっていたりなどもしたが、内容は濃かったため、ゆっくり深く学んでいくスタイルなのだと感じた。

次にメルボルンの市内について。想像以上に治安が良く、特に身の危険を感じることもなく過ごすことができた。食事面でも日本、中華、韓国、ベトナム、イタリア、ギリシャなど数々の国の料理、そしてハンバーガーなどのオーストラリアらしい料理のレストランがあり、値段面を考えなければ食に困ることはなさそうだった。サマータイムを導入しているため夜8時になってもまだ明るいため最初は時間間隔を狂わされるが慣れてくると日が出ている間にいろいろ行動ができるのもいいことだと感じるようになる。通信環境の安さは日本の比にならなかった。その辺のコンビニでSIMを買うことができ、ネットで契約し\$30程度で30日、15GBの4G回線が使えるのである。日本の携帯回線とは同じ値段で使える容量が桁違いで素晴らしい。

この超短期派遣は海外留学というものに対するハードルを少し下げるだけでなく、語学力を含め、自分にどの能力がどのくらいかけているのかを把握する機会にもなり、今後の学びへの糧になると確信できた。

材料系•学部2年

今回のオーストラリア超短期派遣で私は初めて海外に行った。そのため、もちろん楽しみにしていたが、不安も大きく、はじめの数日はホテルの周りを歩くだけでもとても緊張して疲れ果てていた。しかしメルボルンの人々は、私が英語を聞き取れないことがあっても、とても優しかった。それもあって、英語に囲まれた環境にも少しずつ慣れ、買い物などができたことが自信に繋がって、本当に楽しく過ごすことができた。

日本にあまりないような建造物を自分の目で見ることができたことは、良い経験だった。メルボルンの街にはヨーロッパ調の歴史的な建物があちこちにあり、美しい建物を探して回ったが、数が多すぎて見きれないほどであった。教会や図書館が歴史的な作りであることは想像できたが、美しい建物だと思って近づいてみると学校や、普通の店だったということもあって驚きの連続だった。街を移動する時には、よくトラムを利用した。中心部では無料で利用でき、大体は問題なく目的地まで行けた。しかし、メルボルン大学行きと表示されているトラムに乗っても、突然その手前が終点になり大学まで行けないことがあり、日本の公共交通機関との違いに驚いた。

メルボルン大学で講義を受けたことは、海外の大学の雰囲気を知ることができて有意義な体験だったと思う。私の専攻である材料、特に金属については、化学工学あるいは機械工学の一部として扱われ、あまり注目されていなかった点は残念であった。メルボルンは治安も良く暮らしやすい街であったが、留学先としては私には適していないのではないかと感じた。しかし、今回の派遣に参加し、留学の具体的なイメージをつかむことができ、他の国にも行ってみたいと思えたことは収穫であったと思う。今回は英語を理解できずに残念な思いをしたことが多々あったため、勉強としてではなく、今度海外に行く時により楽しめるように、自分の英語力を高めたいと思えたことも収穫だった。

材料系•学部2年

このプログラムが私にとって初めて外国に行く機会となった。今まで外国に行くことに 興味はありながらも不安を感じてなかなか行動に移すことができなかったのだが、周りの 友人が留学に行く姿を見たり、その体験談を聞いたりしているうちに私自身も学部生のう ちに一度は外国に勉強をしに行く経験をしようという気持ちが大きくなり、今回のプログ ラムに応募することを決めた。

プログラム紹介の中でメルボルンは住みやすい街として有名であることを知り、オーストラリアを選んだのだが、実際に訪れてみてその環境の良さはとても感じた。つたない私の英語に対しても親切に対応してくれるお店の人や、レストランで隣になったというだけで気さくに話しかけてくれた人など現地の人の優しさをたくさん受けた。多くのストリートアーティストが活動していたり、街中で目の前をトラムが頻繁に行き来していたりなど、日本とは異なる点はやはり多かったがそれらも全て私の中では新鮮で印象的な光景だった。

今回の参加の目的の一つとして、外国の大学に行ってみたいというものがあった。自分の

英語力が未熟であることは分かっていながらも、どのような講義が行われているのか、どの くらい自分が英語を理解できるのかを知れる機会だと思いながらメルボルン大学に通った。 専門的な内容でありながらも、私が今まで東工大で学んできた内容については理解できる ところもあり、良い経験となった。

このように、今回のプログラムを通して日本にいるだけではできないような経験をたくさんした。特に、自分の伝えたいことを伝えるために英語を学ぶことの必要性と同時に、上手く英語が話せなくても伝えたい気持ちがあれば相手は理解しようとしてくれるということを実感できたのが私にとっては大きかった。メルボルンで過ごした時間はあっという間で貴重な体験ばかりの充実した 11 日間であり、参加して良かったと思えるものであった。

生命理工学系・3年

今回のこの超短期海外派遣は初めての海外であった。今まで日本という世界しか見ていなかった僕にとってオーストラリアは驚きの連続であった。そのうちのいくつかをここでは紹介しようと思う。1つ目は街中を歩いている人の多様性が挙げられる。派手な格好をした人だったり、アーティストやミュージシャンからアジア系の観光客、もちろんオーストラリア人まで実に多くの人がメルボルンの街中にはいた。1人で街中を歩いていても日本人である僕が浮くということは全くなかった。さらに中国人と勘違いされたからか「ニーハオ!」と話しかけられることもあった。普通ではないものを排除するという日本人的な習性とは異なり、いろんな人がいることが当たり前であるという認識からなされる寛容性のようなものを感じた。このような寛容性が人々のフレンドリーさに繋がるのではないだろうか。お店に入ると「Hi! How are you?」と話しかけられることは日常茶飯事であり冗談も交えて営業を仕掛けてきたり、日本語クラブで交流した学生では多くの質問を投げかけられ正直答えるのにうんざりし始めるくらいには色々と聞かれることもあった。オーストラリアの人は相手に対する興味だったり好奇心が強いのもあり自分の知りたいことを知るためにガンガン話しかけてくる。これらは到底日本では経験できないことであり、そういった主張の強さや出会いを大切にする姿勢を見習いたいと思った。

次に大学での授業の様子にも驚いた。講義室の広さやスクリーンの大きさだったり設備の充実さには当然ながら、学生の様子も日本とは異なっていた。ほとんどの学生が授業前には資料をダウンロードして PC でメモを取っており、ペンを用いて紙に書いている人はあまり見かけなかった。また寝ている学生を見ることもなかった。確かに Facebook などの内職を行なっている学生も中にはいたがそのような学生であっても寝ることはなく授業の大事な部分ではメモは必ず取っていた。

ここには載せることができなかったがオーストラリアという異国の知らない世界を体験 することができて刺激になったことは他にも多くあった。この派遣での体験を生かすため にもこれらの刺激を忘れずに日々の暮らしを過ごしたい。

融合理工学系・3年

メルボルン国際空港の出発ロビーに座ってプログラムを振り返ってみると、長かったような短かったような、そんな日々を思い出す。結局、コンビニに売っていた\$1 のフローズンジュースは毎日飲んでいたし、myki の使い方は最後まで分からなかった。メルボルンに



図 106 日没は遅く、20 時頃まで明るかった。



図 107 \$1 のフローズン ジュース。水より安い。

来て、驚いたこともあったし、どこも同じだなと思うことも同じくらいあった。

驚いたこと、一つ目。あるコンビニの店員がアイスクリームを食べながら接客していたことだ。他にも、ファストフード店の店員は同僚と話しながら、「よぉ!今日はどうすんの?」とフレンドリーな接客をしてきたことがある。いずれの例も日本ではまずお目にかかれないだろう。日本では許容されないようなことが、ここでは許容されている理由は、乱暴に片づけてしまうと、"文化の違い"というものなのかもしれない。私は彼らの、肩の力の抜け具合、ゆるさがとても好きになった。力の入れるところは精一杯やって、力を抜くところはできるだけ抜く。意外と日本よりメリハリのついている社会なのかもしれない。

二つ目。"オーストラリアは禁煙大国"という話を聞いていたが、メルボルン市内では煙を呑んでいる人がかなりの数いた。歩きたばこをしている人が多く、日本よりマナーは悪い



図 108 フィッシュアンドチップス。ビール付きで\$20。美味しい。



図 109 1 つの注文でなぜか 2 つ来たハンバーガー。後で回収された。メルボルンはハンバーガーが美味しい。

くらいであった。ただ、これはメルボルンだけの話であるらしく、パースから来ているという学生日く、パースでは煙草を吸っている人がほぼいないとのこと。観光客や出稼ぎの人が多いメルボルンならではの現象だろうか。外国の文化が彼らによって持ち込まれて混ざり合っているのだ。実際、初日に乗ったタクシーの運転手はパキスタンからの難民だったし、仲良くなった学生はシンガポール人とインドネシア生まれのオーストラリア人だった。様々な文化的なバックグラウンドを持つ人たちが混在して生活しているという事実は、先に述べたような "文化の違い"を許容するような寛容さを生んでいるのかもしれない。最終日に観戦した F1 の会場では市内より喫煙者の数は多いくらいだった。ただ、値段は1箱 \$26 前後と、日本の 4,5 倍ほど。恐ろしく高い。

共通項と言えば、学生の"習性"だろうか。講堂の後ろの方に座っていると、講義中に SNS をやっている者、私語をしている者、ソシャゲに興じている者等々、東工大でも見受けられる姿があった。ただ、全体の傾向としては、むしろ東工大より積極的な学生が多い印象だった。例えば、盛んに質問が飛んだり、講堂の前列の方が混んでいたり。積極的に学ぶ姿勢を、我々は彼らから学ぶことができたはずだ。

驚いたこと、三つ目。話しかけられることが多いこと。店員さんに限らず、街を歩いていても話しかけてくる人が多い。持参したフィルムカメラが日程の途中で壊れたので、街のカメラ屋に行ったときは、入店したと同時に、「何探してますか?」と声をかけられた。経緯を話すと、商品を勧めてくれたり在庫を探してくれたりしてくれた。ホテルのエレベーターに乗っていた時は、気さくに「よう、兄ちゃん!今日はどんな日だった?」と声をかけてくる人が多くいて、7階から1階までの短い時間での会話を楽しめた。首からカメラをぶら下げて歩いていると、「良いカメラだね!写真撮ってるの?俺カメラマンなんだけどインスタグラム交換しない?」といった感じでインスタグラムを交換することが3,4回ほどあった。

滞在期間中で、私は彼らの持つ"ゆるさ"が好きになった。そしてその"ゆるさ"は、オーストラリア社会の持つ文化的多様性があるからこそ許容されているものだと思う。文化的バックグラウンドを共有できないからこそ生まれる寛容さは、日本で培うことは難しいだろう。したがって、日本にそれを持ち込む気もないしそもそも不可能であるが、それくらいの気の抜け様、肩の力の抜け様、"ゆるさ"を持って生きていければ、少しは生きやすくなるのではないかと考えている。

書いてみると、驚いたことの方が多くなってしまったが、発見した共通項も多くあることは事実だ。長文になっては良くないので、ここでは省略させていただく。さて、そろそろ搭乗の時間だ。また来るよ、メルボルン。

機械系•学部3年

現在私は大学院への進学という人生を決める重要な分岐点の 1 つに立っている。特に海外の大学院への進学を志しているが、その選択は私に適したものであるのか、それを考えるきっかけとして英語圏であるオーストラリアの大学に赴き、講義を聴講できる本プログラムに参加した。ここでは、約1週間でメルボルンでの暮らしとメルボルン大学について私が感じたこと、それらの経験を今後どのように生かせるかを述べる。

街中を歩いていてまず初めに感じたのが多文化性である。街中に並ぶレストランはアジア系からイタリアなどのヨーロッパ系、さらにはアメリカ系など多種多様であり、どこを歩いていても英語、中国語、イタリア語などあらゆる言語を耳にした。これほどの多様な文化がメルボルンという 1 つの都市で共存し、人々が生活しているという事実に大きなカルチャーショックを受けた。

街には大きな公園がいくつかあり、そこではベンチでゆったりする人々や広大な敷地で 走り回る子供たちがいてメルボルンの豊かな自然とゆったりとした雰囲気を象徴するよう な場所であった。息抜きに昼寝をしたり、気分転換にベンチで参考書を読んだりと、自分に とって勉強が捗る環境であると感じた。

メルボルン大学に関しては、その規模に驚きを受けた。広大なキャンパスが多くの学生たちで活気づけられていた風景が印象的であった。東工大は日本でも比較的学生数の少ない大学であるため、シアターと呼ばれる大教室で何百人もの学生が一緒に講義を受けるという経験は新鮮であった。

講義については、学生のノートの取り方が印象的であった。講義中のスライドの進みはとても速くため、ほとんどの学生が PC やタブレットを用いて重要事項をメモしていた。進みは速いものの、教授の講義はまるで TED Talks ように力説で理解が容易であった。また、講義中に質問をする学生が多く、疑問に思ったことは何でもすぐに質問できる雰囲気や学生も教授を First Name で呼び気軽に議論できる環境は心地よく感じられた。

今回の留学を通して、上述したような留学する大学の雰囲気とその国での暮らしは進学 先を決めるにあたっての最重要ファクターであることを確認できた。長期留学をするということはその期間その国で暮らすことであるため、留学先の大学の名声だけでなく、多文化への理解や周囲の環境など、研究以外の日常的な部分も考慮する必要がある。このことを身をもって実感できたのは本プログラムにおける大きな収穫であった。この夏、アメリカの大学へ1、2か月ほどの留学を考えている。アメリカでの留学はメルボルンのそれとは異なると予想される。そこで今回得た知見をもとに、大学または研究室の雰囲気とそこでの暮らし感じ、それらを比較することで、来年の自分に合った大学院の留学先選びに役立てたい。

8. 参考文献

在日オーストラリア大使館、オーストラリアの国旗、2019年3月2日閲覧。 https://japan.embassy.gov.au/tkyojapanese/aust_flag.html

オーストラリア留学センター、オーストラリアの州と主要都市、 2019年3月4日閲覧。

https://au-ryugaku.com/state/

総務省統計局、世界の統計 2018、 pp28-34、2019 年 3 月 2 日閲覧。 https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2018al.pdf#page=9

Australian Government、Australia-Japan FUNDATION、オーストラリア発見地理・歴史 人口・人口分布、2019年3月2日閲覧。 http://australia.or.jp/_old/discover/chapter01/004.html

Australian Government、Australia-Japan FUNDATION、オーストラリア発見自然・動植物・環境 気候の多様性、2019年3月4日閲覧。 http://australia.or.jp/_old/discover/chapter03/002.html

オーストラリア政府観光局公式サイト、 https://www.australia.com/ja-jp

Instagram @australia の写真を引用、2019年3月5日閲覧。 https://www.instagram.com/australia/

外務省、オーストラリア連邦基礎データ 一般事情、2019年3月2日閲覧。 https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html

Australian Government、Australia-Japan FUNDATION、オーストラリア発見 人種・民族 人種民族の構成、2019年3月4日閲覧。

http://australia.or.jp/_old/discover/chapter05/001.html

地球の歩き方、オーストラリアの通貨・為替レート、2019年3月4日閲覧。 http://www.arukikata.co.jp/country/AU/info/currency.html 世界経済のネタ帳、オーストラリアの GDP の推移、2019 年 3 月 4 日閲覧。 https://ecodb.net/country/AU/imf_gdp.html

World's Top Exports、Coal Exports by country、2019年3月4日閲覧。 http://www.worldstopexports.com/coal-exports-country/

オーストラリア留学センター、オーストラリアの教育制度を知ろう、 2019 年 3 月 5 日閲覧。

https://www.aswho.com/system

オーストラリア留学センター、オーストラリアのお金、2019 年 3 月 24 日閲覧。 https://au-ryugaku.com/au-money/

一般社団法人 日本船主協会、n.d. 、海運雑学ゼミナール 241 見過ごされた新大陸―オーストラリア、https://www.jsanet.or.jp/seminar/text/seminar_241.html、 2019/03/04アクセス

オーストラリア政府観光局、n.d. 、オーストラリアの歴史、 https://www.australia.com/ja-jp/facts/history.html、2019/03/04 アクセス

オーストラリア外務貿易省、2014、Australia in Brief、https://japan.embassy.gov.au/files/tkyo/australia_in_brief_2014.pdf、2019/03/04 アクセス

JTB、2017、オーストラリア先住民族・アボリジニの伝統文化を体験しよう、 https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/report/AU/2017/02/aborigine.html、2019/03/04 アクセス

オーストラリア留学の準備マニュアル、

https://isac.net.au/kishochishiki/rekishi.htm, 2019/03/06

オーストラリア教育旅行ガイド、

http://www.travelvision.co.jp/schoolaustralia/learn/history-culture/history/australia.php, 2019/03/06

オーストラリア政府観光局「オーストラリアの歴史」

[online]http://www.travelvision.co.jp/schoolaustralia/learn/history-culture/history/australia.php (参照 2019-2-25)

日豪関係史[online]

http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/kobeya/AustraliaHistory/jau/contents.htm (参照 2019-3-06)

National Gallery of Australia. 「Max Dupain, Surrealist study 1938」. https://artsearch.nga.gov.au/detail.cfm?irn=167050.(2019.03.04 閲覧).

ART Gallery of NSW. 「Max Dupain, Sunbaker 1937, printed 1970s」. https://www.artgallery.nsw.gov.au/collection/works/115.1976/. (2019.03.04 閲覧).

Encyclopaedia Britannica.「Max Dupain Australian photographer」. https://www.britannica.com/biography/Max-Dupain. (2019.03.04 閲覧).

National Portrait Gallery.「Max Dupain」. https://www.portrait.gov.au/people/max-dupain-1911. (2019.03.04 閲覧).

Frank Fenner. 1996. "Florey, Howard Walter (1898-1968)". Australian Dictionary of Biography. Australian National University. http://adb.anu.edu.au/biography/florey-howard-walter-10206, (2019.03.24 閲覧).

Bun45 オーストラリア辞典 Florey, Howard Walter, http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/dicthtml/00417_FloreyHowardWalter.html, (2019.03.05 閲覧)

大阪大学大学院文学研究科藤川研究室、オーストラリア辞典、Paterson, Andrew Barton("Banjo")、2019年3月2日閲覧、

http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/dicthtml/00909_PatersonAndrewBarton.html

Encyclopaedia Britannica、Banjo Paterson、2019年3月2日閲覧、https://www.britannica.com/biography/Banjo-Paterson

The sense of Oh! 元気になる教養、Waltzing Matilda(ワルティング・マチルダ)人気の秘密、2019年3月3日閲覧、

https://the-sense-of-oh.com/waltzing-matilda ワルティング・マチルダ人気の秘密/

メルボルン公式サイト https://www.melbourne.vic.gov.au/Pages/home.aspx

世田谷区公式ホームページ-世田谷区について

http://www.city.setagaya.lg.jp/kurashi/107/157/index.html

City of Melbourne: Economic Profile http://melbourne.geografia.com.au/

GFCI http://globalfinancialcentres.net/gfci24/

Arts House https://www.artshouse.com.au/whats-on/

メルボルンの遺跡・旧跡事情

http://veltraman.com/melbourne/tourism/heritage/index.html (2019.3.5 閲覧)

メルボルンの歴史と遺産 https://jp.visitmelbourne.com/Regions/Melbourne/Things-to-do/History-and-heritage (2019. 3. 5 閲覧)

留学Blog https://schoolwith.me/columns/31831 (2019.3.5閲覧)

4travel. jp https://4travel.jp/travelogue/11304643 (2019. 3. 5 閲覧)

IMDb, Cate Blanchett, https://www.imdb.com/name/nm0000949/, (2019.3.4 閲覧)

映画.com, カイリー・ミノーグ, https://eiga.com/person/23816/, (2019.3.4 閲覧)

allcinema, ケイト・ブランシェット(Cate Blanchett)のプロフィール, http://www.allcinema.net/prog/show_p.php?num_p=87412, (2019.3.4 閲覧)

Warner Music Japan, *Kylie Minogue/カイリー・ミノーグ プロフィール*, https://wmg.jp/kylie-minogue/profile/, (2019.3.5 閲覧)

Peter Singer, Photos, https://petersinger.info/photos, (2019.3.5 閲覧)

Peter Singer, About Peter Singer, https://petersinger.info/about-me-cv, (2019. 3.5 閲覧)

9. 付録

9-1. 収録内容について

No.	食事処・店名	No.	目印・買い物処・観光地名
1	8 bit	1	Mercure Welcome Hotel Melbourne
2	小街籠館	2	BIG W Queen Victoria Village
3	Hana's Kitchen	3	Coles Melbourne Central
4	IL Nostro Posto	4	STATE LIBRARY VICTORIA
5	Grill Steak Seafood	5	Queen Victoria Market
6	Tokui Sushi	6	University of Melbourne
7	Ramen Bankara	7	Flinders Street Station
8	ALDI Melbourne CBD	8	Flagstaff Gardens
9	Pie Face	9	Treasury Gardens
10	Hofbräuhaus	10	Fitzroy Gardens
11	Brunetti Carlton	11	Rod Laver Arena
12	Union House	12	Eureka Sky Deck
13	BearBrass	13	Royal Botanic Gardens Victoria
14	Betty's Burgers & Concrete Co	14	Great Ocean Rd
15	Gullivers Wine Bar & Eatery	15	St. Kilda Beach
		16	Brighton Beach
		17	Little Cupcakes
		18	St. Patrick's Cathedral
		19	Luna Park
		20	Albert Park
		21	Royal Arcade
		22	Block Arcade
		23	Crown Casino
		24	MARU KOALA & ANIMAL PARK
		25	Phillip Island
		26	Coldstream Hill Winery
		27	Dominique Portet
		28	Domain Chandon
		29	Yarra Valley Chocolaterie & Ice
			Creamery

